第四百四十一號目次

◎口繪

ヘレン、ケレル孃とサリバン女史

◎社說

盲啞才女ケレン、ケレル孃と其訓育者アンナ、サリヴアン　青柳猛

◎家庭

滋養の品々

家庭養蠶の樂　新渡戸まり子

出席日取早見表　さくら

◎文藝

案山子題舍諸社中詠草

◎雜錄

印度女傑ラマバイ女史大飢饉避難の實歷談◎古事斷片◎春日野遊（告天子○此處、彼處）大塚楠緒子

◎隨感

大勢の人◎官祿

◎時文

◎脚本俠客春雨傘◎花柳お多福◎舊幕府

片々◎時報

社告

◉本誌は毎月二回即ち十日、二十五日の兩日を以て發行す

◉十日發行の分は稍や簡易實際を專らにし、第一、家庭の整理改善に益ある事項を主として、其他、文藝、史傳、問答等の諸欄に重きを置き、二十五日發行の分は、女學教界に對する吾黨多年の主義を發表するもの。

◉單に十日發行の分のみを購求せんと所望せらるゝものあらは其望に應ずべし

女學雜誌定價表

前金	廣告料	送金	注文
壹冊 價金拾錢（無郵稅） 一年前金 金貳圓	一行一回（廿四字詰）前金十錢 同 三回以上 一割引 同 六回以上 二割引 但し不道徳なる廣告は謝絶す。慈善の廣告は社誌ノ上無代價にて引受く	爲替は東京麴町郵便局に宛て小爲替にすへし（郵便切手にて送る人は五厘切手にて且つ一割增を添ゆへし	注文は東京麴町區下六番町六番地女學雜誌社あてに申越さるべし

第四百四十號目次

社說

實際の人品　青柳猛

女學

女學校に實益ありや

卒業の女學生に告ぐ

女子就學を增加せしむる方案

評論

西鄕南洲と勝海舟　落花漁人

花の四行　鷗村

隨感

聞くとの樂しみ◎誤解邪推なきもの何處に在りや◎海舟先生得意の感話◎名僧家政を訓す◎本多家維新前の施藥

教育

普通教育に於る宗教

現今の小學教育

教科書に就て（一、二）◎教育雜誌（再）◎皆惑へり◎小學校の優等生◎小學校は半ば遊戲場なり◎留學生の話　由汕子

雜錄

蜘蛛、蜂、少女○鑛毒被害地の人々に代りてよめる（泡鳴子）

立ん坊　一暇夫

花影小談（遊藝の妙◎花の下の俗物◎人を見るの遠近と大小）

古事斷片（二）◎案山子題舍諸社中詠草　長汀

時文

契中兩悶梨◎僧服改正論◎新著月刊◎小說八家選◎新小說第八號◎小御門◎海軍論話◎女界文壇雜俎

片々◎時報

Digitized by Google

Original from
CORNELL UNIVERSITY

第四百四十一號目次

◎口　繪

[illegible]

◎社　說

[illegible]

◎家　庭

滋養の[illegible]
家庭[illegible]
[illegible]

◎文　藝

案山子[illegible]諸社中詠草

◎雜　錄

印度女傑ラマバイ女史大飢饉[illegible]
古事斷片◎春日野遊(告天子○此處、彼處)大塚柿緒子

◎隨　感

大勢の人◎官祿

◎時　文

◎脚本俠客春雨傘◎花柳[illegible]◎[illegible]

片々◎時報

社　告

[illegible]

[illegible]對す
[illegible]するもの。
[illegible]を購求せんと
[illegible]らは其望に應ず

女學雜誌定價表

前金	[illegible]　無稅
廣告料	[illegible]
郵券	[illegible]
注文	[illegible]女學雜誌[illegible]

[illegible]

詩　歌

[illegible]

隨　[illegible]

[illegible]

教　[illegible]

[illegible]小學校の[illegible]生[illegible]小學校は半ば遊戲場なり
[illegible]學生の話

雜　錄

蜘蛛、蜂、少女○鑛毒被害地の人々に代りてよめる(泡鳴子)
立ん坊　一暖夫
花影小談(達藝の妙◎花の下の俗物◎人を見るの遠近ミ大小)　長汀
古事斷片(二)◎案山子廬舍諸社中詠草

時　文

契中岡樹梨◎僧服改正論◎新著月刊◎小說八家選◎新小說第四號◎小御門◎海軍雜誌◎文界文壇雜俎

片々◎時報

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

女學雜誌

明治三十年五月十四日發兌

第四百四拾壹號

社説

THE ESSAY IS RESPECTFULLY DEDICATED TO

MISS ANNA SULLIVAN

BY

A TEACHER OF THE MEIJI LADIES' SEMINARY,
TOKIO, JAPAN,
AS A TOKEN OF HIS ADMIRATION OF HER

DEVOTED WORK FOR THE
BLIND-DEAF-MUTE GENIUS.

He asked not whence the fountains roll
No traveler's foot has found,
But mapped the desert of the soul
Untracked by sight or sound.

—*Holmes.*

盲啞才女ヘレン、ケレルと其訓育者アンナ、サリヴアン

青柳猛　記

瞽者は視、聾者は聽き、貧き者は福音を聞かせらる。

聖馬太傳經之語

奇跡の時代は長へに去りて再び來らず、バビロンの釣り庭も、ピザの傾斜塔も、將又萬里の長城、フヰデヤスが作れるてふジユース神の御像も、世界七不思議のうちに數へらるゝ能はず、所謂不可思議なるもの、跡を世に絶てりとは、今の世の人々が常に口にする處なり。然れども此の如くにして、奇跡なしといふものは、御神の妙なる御工を信ずること篤からざる愚者の語るべき所なり。苟も天地萬象の眞美を愛するの儕ならんには、誰か其奇と其妙とに驚かざらん。牝牛青草を食ふて白き乳を出す、あゝ！これ一大奇跡に非ずやと、マホメットが言へるは眞なり。見よ、神右の手を動かして、其眼に觸れ給へば、瞽者視ることを得、左の手を以て其耳朶に觸り給へば、啞者その戸を開かる。奇跡は學術の進むと共に益々世に殖え愈々その數を増すに至る。何ぞ奇跡の時代既

に過ぎ去れりとはいふ。今の世は實に奇跡の時代なるべし。玆に一大不可思議一大奇跡あり。之を盲啞才女ヘレン、ケレルがことゝなす。今や世界は此の才女が智能の啓發驚くべきものあるに驚殺せられ、其訓育者サリヴアン女史が、非尋常なる技倆を賞嘆するに忙はしく、詩仙之がために歌ひ、都鄙の新聞雜誌、また競ふて斯の事を載するに至れり。

我が亮一大須賀氏は、智に於て情に於て將た意に於て、配合其よろしきを得、圓滿殆と欠ぐるなきの人なり。其白痴教育の視察を終りて米利堅より歸り、予の氏と面接するや、話頭第一、談する此事を以てせらる。氏亦驚嘆措く能はざるものの如し。蓋し其世を驚かす此の如き所因のものは、身聽くこと能はず、また視ることとなき盲啞にして、志かも、齡を重ぬ僅に十七年の少女にありながら、よく英佛獨羅典等古今内外の語に通じ、文才衆人に秀で、來る六月には、有名なるハーヴアード大學附屬のラドリッフ高等學校に入り、業を終ふるの曉にも至らば、バチエラー、オブ、アーツの學位をさへ得らるべきものあればなるべし。

斯る奇跡は如何にして行はれ、又如何にして行はれんとしつつあるか。之を知る、必ずしも火藥を氷中に探るが如く無益の骨折りもあらざらむ。

想ひ起す。今を去る大凡五十年、かの有名なる北米パーキンス訓盲院に長たりし博士サムエル、ヂー、ハウなる人、聽くこと能はず談ること能はず視ることとなき一ローラ、ブリッヂユマンなる八歳の少女を得、其臭味の兩覺さへ頗る覺束なきものあるに屈せず、觸覺の唯一感覺を力として之を訓導し、胸中無限の寶藏を開て、其天眞を煥發せしめ、盲啞教育上未曾有の一大活例を示し、カーライル、ディツケンス、ナイティンゲール、マルチノー、シドニースミス等識者の悅ぶ所となりしあり。ヘレン、ケレルの今日ある、素よりサリヴアン女史其人を得たるによるといへども、溯りて之が源を尋ぬれば、博士ハウ氏の賜なりといふも、敢て不可なけむ。

ヘレン、エー、ケレル(Helen A. Keller.)は、アラバマなるタスカムビヤの人にして、明治十三年六月廿七日を以て生れ本年芳紀漸く十七。父母共に強健賢明に、特に父は長く其地方にありて、一新聞に主筆の職を取りしが、不幸昨年の暮を以て病沒せり。ヘレンが智能驚くべく文學語學の才に富むは、

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

蓋し亦雙親の血に受くる處あるなからんや。ヘレン身は盲なりといふも、たゞ視力を失ひたるといふにとゞまり、雙眼はなほ潤として開き、無限の愛嬌を其ほとりに漂はして、何等悲嘆の色あるなく、頗る樂天の相に充ち、容姿端麗、米州又得易からざるの佳美人なり。其短きブロンドの髮毛は、垂れて肩の上にかゝり、光線の冠を戴けるが如き、人と共に談ぜんとするや、必ず先づ其躰をかたむけて客の前にすゝめ、眼をその人に注ぐが如くす、誰か之を見て、盲なりといふものあらん、然れどもヘレンは盲なり、また聽くことだに能はざるなり。

ヘレン生れて僅に十九ヶ月、激烈なる腦充血病を憂ひ、腦の中樞部を傷ふこと甚だしかりしかば、遂に世にもまれなる悲運に沈み、其眼其鼻其口は依然として舊の如くなるも、聽器視器發聲器の三者は全く其機能を失し、聽くことなく視ることなく語ること能はざるに至れり。之が親たり、これが友たるものゝ痛恨果して如何ばかりぞや。然れども、術のあるにもあらねば、悲むべし、天賦の英才は空く、暗黒の間に葬られて、七歳の春を迎へたりき。ヘレンの雙親は共に厚德善

行の聞へ高きの人、其孃の盲となり、啞となれる、素より其罪に非ず、たゞ神の業のこれによりて愈々益々顯はるゝの切ならんがため歟。見よ、アンナ、サリヴァン(Anna Sullivan.)女史なる人出で、戶の外に立て叩く。聲は聞え、戶は開かれんとす。篤信の儕輩よろしく眼をあげて之を仰ぐべし。

讀者もし卷首揷む所の肖像畵に其眼を注がば、必ずやサリヴアン女史が眼光の、一種の異彩を放ち。多くの人と其趣きを異にするを見ん。これ女史が亦自ら多年其明を失ひ居りしの致す所にして、ヘレンが情狀眞に憐むべく泣くべきものあるを察し、身を擢んでゝ、之が訓育の責にあたりしが如きも、又多年の不幸よく、我を以て他の忍ぶべからざるものを推し同情の念禁じ難きものありたればなり。その未だ視ること能はざりしや、かの博士ハウ氏が長たりしパーキンス訓盲院に入り、薰陶を蒙る所ありしが、後幸にして、外科手術を施こし、天日を拜するの悦びを得、のち暫く斯校に敎官の職を取りたり。是を以て、ヘレン、ケレルの敎育訓導をなすに當りてや、先づ己が經驗せる所に鑑み、昔ハウ博士がローラ、ブリッヂユマンに施せるの法を應用し、大に工夫辛苦する所

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

ありたり。これぞヘレンが寶藏を開けるの鍵なりけらし。
其始て事に從ひしは、明治廿年春三月二日にて、一見その打ち沈めるの景色もなく、擧動何となく優佳敏活にして、神經質の氣味さへ帶ず、愉然快然群童のむれに混じて、翻飛びなどし、聲うら高く笑ひ騷ぐを見、尋常の盲人啞者と類を同うして考ふべからざるを思ひしが、實際之が訓育の勞を取るに及んでや、かのハウ氏がローラ、ブリッヂユマンをして覺らしむるに三ヶ月を費やせしもの、ヘレン、ケレルは、之を一週日ならずして覺り、二年を費やせしもの、之を四ヶ月ならずして會得するものあるを知れり。之を才女といひジニヤスといふ、過言に非るべし。

最始の訓導教育法は、先づ、物必す之に名あり、名あれば必ず之を表彰するに記號あるを以てせり。初めの日、サリヴアン女史ヘレンを攜へて教室に至り、其手を伸ばして一つの人形をさすらしめ、後、指を以てヘレンの手に觸れ、之によりて D-O-L-L (人形の意) なる符號を印したりしに、幾何ならずして自らこの符號を繰り返して其師に示し、恰も之を理會せるものゝ如くなりき。此の如くにして、物に遇ひ事に

接する每に其名を教へられ、數日を出でざるに、指によりて傳へらるべき傳信符號は悉く之を知得し、一週日にして事物必ず名ありとの思想を抱き、八月の末つかたにには早や六百廿有五の物名をさへ覺るに至り、heliotrope; chrysanthemum など頗る誦し難き長文字の如き、容易に之を記臆し、決して忘れ去ることなく、大に聞くものをして驚かしめたり
其後サリヴアン師の教導益々よろしきを加へしより、思想の鬱結に基せる短慮の癖も、やゝ跡を絕つを得、凸字本及針穴にて文字をあめる書籍の助により、新智識を吸入し居りしが未だ語るの道を知らず、思想はたゞ之を手指の傳信法によりて顯はすにとゞまりたり。然れども、ヘレンが十一歲の秋なりけり。諾威の盲啞兒ラグニルド、カアタなるものゝ、よく語るのみちを教へられたりと知り、一日手指を以て『我れ語らざるべからず』と其師に傳へ、大に乞ふ所ありたり。其心根の哀れにも殊勝なるさま、誰かは泣かざるべき。由て直にホーレスマン學院なるサラー、フルラー女史の許に送られ、發音法を仕込まれたりしが、僅に十一回の授業を重ねたるのみにて、普通の啞兒が數星霜の訓導をも凌ぎ、一ヶ月ならざ

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

るに、巧に聲音を發して相談ずるに至り、今や殆んど常人と異る所なく啞兒の發音に常なりといふ單調の響さへ見えず、時に抑揚あり、頓坐あり、亦よくシェークスピヤー、ゲーテ、シルレル、ユーゴー、ラシッヌ等の諸作を誦すと。大須賀氏のヘレンに會するや、ヘレンよく之を迎へ、氏のため、特にハムレットの曲を選み、其一節を朗讀するところありしが、恰も胸中に蟠れる無限の沈澱が、今俄に一塊をなして吐き出されたるもの丶如く、語音の間また滋味を帶びて、やゝ聽え易からざるものあるに似たりと雖ども、是れさへ一トしほのあはれを添へ氏をして、ありがたさに感激劇甚なるあらしめしとかや。又かのホーレスマン學院にあるの間、語る者の脣に其指を觸れ丶、話すところの何なるかを知る所謂脣動讀了法なるものを學び、手指傳信法によらずして、なほ人のいふ所口にする處を覺るに及べり。それより以後、思想の交通をなすに當りては、受信は多く之を脣動讀了法よりし、自らは言語を以て答へ、また問ふを常とす。蓋し手指傳信法によりて受信するに當ては、傍にサリヴァン師のあるありて、人の語る所を飜譯し之を指に移さゞるべからずして、其間常

に二重の手數を要するものあり。これその多くは脣動讀了法を取るの所以ならんか。此の如くにして、脣動讀了法によるも、將又手指傳信法によるも、外界との交通は悉く知覺神經の媒介に外ならず。さればにや、其手指觸覺の如き、銳敏眞に驚くべきものあり、もし之を唱詠者の咽喉に觸れしめばよく半調子の差違をも識別し、自ら又之と同じ高さの發聲をさへなすを得べしといふ。此の如くにして、一定度の發聲をなすを得るは、其術談話を學ぶと毫も異る所なく、顏面、口脣、喉頭、齒牙等に己が指を接して、之が運動を知り自ら之を眞似るにあるなり。又ヘレンの眼素より之を見るに非ず耳素より之を聽く能はずと雖ども、空氣中の波動を感知辨識して、戶の開閉、室內の如何をも、よく覺る所あるべし。なほその嗅覺の如きも、頗る銳敏、人々固有のにほひにより、其人を分別すること恰も獵犬の如きものあり、一たび相接する人は、數月を經るも、其聲を聞かず、其躰に觸れずしてなほその誰なるかを知るを得るなり。十四歲の頃よりは、紐育なるライト、ユーメーソン學校に入り、數學歷史地文等普通敎育を受くるの外、聲音の整調と脣動讀了の法とに精勵しな

ほ佛獨兩國語をも學び、今や何の澁滯なくして、これ等を繰ることと猶ほ英語を語るが如し。曾て一佛人あり、たま〳〵ヘレン、ケレルに邂逅しその巧に佛語を談ずるを見、初は少もヘレンが盲啞なるを覺らず、或は其佛人に非るなきやを疑へるほどにして聞くもの、皆一驚を喫せざるなし。ヘレン、ケレルが語學の才に長ぜるは既に畧述べたるが如くにして今や切に希臘語の研究を懇望するも、過度の苦學は身を損ふの恐ありとて訓育者は未だ之を許さず。而して文才の尋常ならざるものあるは、更に驚くべく、詩的趣味に富み、想像力の及ふ處、殆んど無限、よく宇宙の眞美に靈覺し、天然の風光人事の狀態に感激し、文學の粹を味ひ之を樂むの力あり、自ら又韻文を草し、散文をものするの技能さへ備はりて、その詩形其文體の如き、大に見るべきなり。左に揭るは

We climbed up to the head, which will hold forty persons, and viewed the glorious scene, on which the bronze Liberty gazes day and night. And O, how wonderful it was! We did not wonder that the great French artist thought the place worthy to be the home of his grand ideal. The glorious bay lay calm and beautiful in the October sunshine, and the ships came and went like idle dreams; those seaward going slowly disappeared like clouds that change from gold to gray, and those homeward coming sped more quickly, like birds that seek their mother's nest. The city's busy noise and turmoil were hushed, and how beautiful she was, as she stood wrapped in October's misty veil! I saw it all with the eyes of my soul—all its beauty and mystery, and in my heart I cried, "O glorious Liberty, guard well this highroad of the nations: look down in tender benediction from thy majestic eminence on this fair home of freedom until the sun shall sink to rise no more!"

ヘレンが數年前ヘッドロー島なる自由の銅像を見舞ひし際、

その日記にとめたる文の一節に外ならざるも、誰か之をしも、十二三歲の盲啞少女が筆になれりと思ふものあらん。我れ聽くの耳あり視るの眼ある日東國の有髯男子啞然として言ふ所を知らず。さればケレルが將來を卜して樂むの士女、皆な曰く、ヘレンは遂にコロムビヤ大陸の女性文學に花を飾り其名を不朽に傳ふるに至るべしと。嗚呼アングロサクソン人種、爾も亦榮ある民なる哉。其祖先は前に盲詩人ミルトンを出し、盲目郵務官フォーゼットを生みたりしが、今や其子孫亦盲にしてしかも、啞なる巾幗詩人を出さんとす。われに檢校塙保己一あり、作者馬琴あり、少く慰るに足るが如しと雖ども、なほ足らざるが如きを恨む。

翌くれば昨年の夏六月のことなりける。サリヴァン女史、ヘレン、ケレルを携て、マサチユーセット州ケムブリッジなる、アーサー、ギルマン氏の許を訪ひ、聽視の兩覺共に完備せる普通の學生と共に、ヘレンを氏が管轄下なるケムブリッヂ女學院に入れしめ、その教室に出席するを許し、ハーヴアード大學入學試驗の準備をせしめられんことを乞ひたりしかば、初はギルマン博士も頗る其可否に惑ひ暫く決する處なかりしも、遂に之を許容し、之が成蹟を見に頗る良好のものあり、今なほ其校に止りて數學英文學英國史拉典語及高等なる

耳曼文學の諸科目を學修し、この六月のハーヴアード入學試驗に及第せんとして鋭意研學、毎朝九時より十二時卅分まで教室に出でゝ、衆生と共に授業を受く。こゝを以てサリヴアン師は常に教室に其側に侍し、教授が語り又教ふる所を手指傳信符號に移して、聞くに從てこれをヘレンの掌に傳ふ。此の如くにして其學ぶ處覺るところ、毫も明視敏聽の女子輩に異るなく、否な寧ろ彼等に優るものあるなり。かゝれば、ヘレンとサリヴアンとは遂に離すべからざる異身にして同躰なるもの、蜜月にある夫妻も其交情なほ之に如かざるべけむ、常に相擁し相抱き、互に離れず離さず何處に行んとするも必ず相伴ふ。天地の眞美粹此處に鍾れりといふべき乎。見る人の眼、ために羨む。卷首に掲ぐるは、乃ちその手指傳信法を行ひつゝあるの眞景にして、昨臘大須賀氏が面接の砌特に請得たるもの、蓋し最近の寫影なりといふ。其授業時間なる九時より十二時三十分に至るの間には卅分の放課時間あり。この時には、ヘレンも亦他の女群に交り、ピヤノの曲調に和して、共に踏舞して樂む。其態度といひ、拍子といひ、殆んど欠ぐるなき程にて、近頃は亦、二輪の自轉車をさへ、自由に乘廻して、少も恐るゝ所なく、また過つ所なしと。世に亦驚くべきものならずや。是に至りて、或る實驗心理學者はいふ、これ凡ての感覺は、皆な其源を知覺神經に發するの證なりと。その果して然るものあるや否やは、暫く學者の一考に委す。然り而してギルマン博士のヘレン、クレルの訓育を始めんとするや、先づ其果して如何ほどの程度までに進歩し居るか、その學力智能の如何なるものなるやを試みんとし、その六月に行はれたるハーヴアード入學試驗の問題四種を出し、大學に於けると寸毫相異るなき條件のものに、その答案を作らしめしに、何等の準備もなく、又此ることには至て不慣なりしに拘らず、成績の善美驚くべく、之を入學試驗委員なる一大學評議員に見せしめしに、一讀讃歎措かず、充分入學の資格ありとなし、多くの答案中また稀に見るものなりといへり。然り、その叙事の優麗にして文雅なる、又事を論じて、精確緻密なる、眞に比ぶべきなし。されば來六月のハーヴアード入學試驗に於ては、盲啞なるの故を以て別に特典を與へらることあるなくも、五六時間ならずして、その試驗を終へ、首尾よく及第してラドクリッフ高等學校の門に入る

の榮を得べしとは、是れギルマン博士の明に證言する所にして、其後ケムブリッヂ女學院に於て、英才の譽れ益々高く教授もために舌を卷かざるもの稀なり。されど、其才やゝ文學の一方に走り、科學的智能の之に適はざる如きの觀あるぞ、上なきの恨みなる。然りと雖とも、バイロン、シエレーの徒を捕へて、ポーテンシヤルの法則單一笠の運動を論ずることの無理なるを觀じ來らば、何ぞ之を歎くべけむ。却說ヘレンが學院に入りて、學事を始めしより、僅に三週日乃ち昨十月の終つかた、一日史學教授某、課題を與へ、諸生をして、偉人及大王の特質如何を論ぜしむ。時にヘレン文あり、曰く、

WHAT QUALITIES MAKE A NOBLE MAN AND A GREAT KING?

"A noble man!" What do I mean by "a noble man?" I certainly do not necessarily mean a man of high rank, power or wealth, as the Romans did; but, to my mind, a noble man is he who strives to attain that which is beautiful and imperishable—love. Love is the foundation on which all nobility must rest. If a man has love in his heart it will find its expression in many beautiful qualities, such as patience, courage, and charity. He is patriotic, honest and firm; he labors, not for promotion, but for the sake of the good which his work will bring to those around him. He is a true friend, whom all can trust, and all that is beautiful and good calls forth his warm enthusiasm. In a word, he is always "valiant and true." A truly great king possesses all these qualities, and many others, which are necessary in the dischargement of his many arduous duties. He will be self-controlled, clear-headed and quick to perceive the right thing to be done, and the best way of doing it. He will be strong, honorable and just; he will respect all the sacred things of life, such as liberty, property and education; and he will encourage the pursuits of peace—science, art, literature, agriculture and so forth. When he fights, it will be to defend his country against its foes, not for the sake of conquest or vengeance. In short, he will be "like unto the King of kings."

Such a man, and such a king was King Alfred of England. He did not seek his own glory or fame; he had but one ambition, and that was to leave his people better and happier than he found them. After having driven out the Danes, who had for many years been ravaging and plundering the country, he first gathered the wisest, best men from all parts of his dominion around him, and then he set to work patiently to establish law, justice and order in the land. He rebuilt the old monasteries, and founded new ones, so that the people might learn to read and write, and gain useful knowledge; he himself translated some of the best books he could find from Latin into English. Consequently history tells us that he was the best and most beloved king England ever had.

これ實に聽くことなく視ることなき少女の文字なり。これ聽覺なく視覺なく、盲また啞なる少女の作なり。實にその作なり。

倘又是等の美文を始め、試驗の答案及日常書信の如きも皆タイプライター印字機を使用して自ら認むるものなりとぞ。

ヘレン元來『死』の何物たるを知らざりしが昨冬その父を失ひしより、やゝ茫漠の間に之を解し得たるものゝ如し。其ケムブリッヂにありてこの報を耳にするや、悲痛おかず、直に走りてアラバマに歸來せんとせしも、之がため或は感情を刺激すること甚しく、遂に其身を損ふに至るべきを慮り、しきりに之を制するの人ありしより、思ひ止るに至りぬ。噫、彼れ又遂に命の實を食ふ。悲むべき哉。

ヘレン亦世にもまれなる慈善の心いと深く、己と等く不幸の境遇に浸沈する、視ること能はず聽くことなき盲啞貧兒トムミー、ストリンチヤーのため、今や特に敎育資金を募集せんとし、之を天下の仁士に訴へつゝあるの、けなげさよ。あはれ、餘りあるの人、其嚢を傾けよ。

ヘレン、ケレルの始て人に接見するや、必ず先づ自らその口を開くを常とす。而して其如何なる人なるやを知らんとして、志きりに多くの問を發し、之によりて其品性特質のある處を探ぐらんとすること、頗る歐米に於ける李鴻章が擧動に似たるものあり。されど彼の如く其言辭志かく粗野ならず、其いふ處凡て端正、漫に人の一身に立ち入りて尋ねず、禮儀大に整へるものあり、簡明にして冗語なく、よく其意をつくし、またやゝ速調の嫌なきに非ずと雖ども、まゝ諧謔笑聲を交ふ。ヘレンの胸中天眞に滑稽思想の貯へあるあり、時に應じてよく流れ、よく笑はしむ。客と接見して、人と語るの間は常に其手をサリヴアン師に握ぎらしめ、手指傳信法により、其いふ所を覺る。掌もし二指を以て‥の如く押さるれば、これAの符號にして、三指を以て∴の如く壓せらるれば、これ?の符號なるが如し。然れども時にかの唇動讀了法により、師の力を借らずして自ら人のいふ處を聞くことあり。これをなすには、本文挿圖の示すが如く、先づ人さし指を輕く上下兩唇の上にのせ、中指を鼻に觸れしめ、然して母指は之を喉頭のほとりに置き、其他の二指は凡て之を頰の上に止まらしむるなり。

人の心情に於ける些少の變化も、ヘレン、ケレルはたゞ其人と相遇ふのみにして覺るを得べく、感通の機敏迅速なること、殆んど鬼神を欺くに似たり。人もし悅びの心をうちにひそむ

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

れば、其眼に微笑の漂ふと覺り、人もし悲みの心に歎かば、涙其瞼を濕すと知る。されば、サリヴアン女史の少しにても常に異りて、心中鬱々たる如きものあらんか、直に之を知りて、數々其星を衝き、女史を苦ましむることあり。女史は素とこれ、快活洒然たるの人、ケレルまた其感化に預りて、輕快些も淀まず。是に於て、人が不快の感情あるを感知すること、殊に速かなるものあるなり。

筆を走らして茲に至れば、才女の影、茫として孤燈の下に顯はれ、將にその口を開かんとするもの丶如し。忽にして想ひ起す、亡靈アスターテの聲。マンフレッド！マンフレッド！ヘレンは、我れに何をか語らんとはする。石叫べり、石叫べり。筆を投じて耳をすませば、蛙聲のたゞ僅に沈默を破るあるのみ。四面皆な寂々、夜また既に深更、嗚呼天地は啞なり、天地は盲なり。嗚呼盲啞。

願一子の曰く。我れ、ヘレン、ケレルのこと、一たびは之を大須賀氏に聞き、今またとの文を草せんとして數々讀む所あり、讃嘆の情自ら起りて禁ずべからずといへども、教導其道を得て、茲に天眞の煥發せられ、空前の異彩を放ちたる、その素よりなるものにして、敢て賞揚歎美するに足らず。然れどもアンナ、サリヴアンや、千苦万難を忍んでこの聖業に從ひ、十年の星霜をいと小きひとりのために費し、石をして叫ぶあらしむ。之を思へば、誰かは、肅然として有り難さに涙咽ばざらむ。九十九の羊にもいやまして迷へる一疋に御心を痛ませ給ふの御神、如何に悦ばせ給ふべきか。我れ非才薄德淺學の身を以て、漫に聖職を瀆して育英の任にあり。而して視るべきの眼、聽くべきの耳あるものを導て、却て視ること能はず、聽くこと能はざるものたらしめ、亦語るべきの口を閉ざして、好で人爲の啞たらしむ。過て其口を開かしむるも、語る所は智慧に非ずして、さま〲の虛僞といつはりとにて充つ。もし聽くことあれば、是れ耳を煩はすの言葉、もし視ることあれば、是れ眼を瀆すのもの、しかも倦惰怠眠のこゝろを其胸中に蟠らしむ、師といふべけんや。我れもし有德の君子にしあらば、人自らその前に出でゝ正しかるべし。如何ぞ僞るを得ん、如何ぞ惰るを得ん。茲に靜に内省し謹でアンナ、サリヴアンの勢力驚くべきものあるを思へば、慚死身を處すべきところを知らず。世の女子と小人養ひ難し

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

といふの僻聾よ聞け。茲に石をかへてアブラハムの子となせるの人あり。尋常の五官と尋常の智能とを備へたるの子女、如何に曲り如何に僻したればとて、專心一意熱情熱涙、以てその事に從はゞ、豈に遂に濟度し難からんや。大須賀氏告げて曰く、サリヴァンの事業、ヘレン、ケレル一人者のことにかゝるが如しと雖ども、其盲啞教育に及ぼす所頗る夥しく、千百の盲啞を平々凡々の間に育てあげたるに勝ると。豈にたゞ盲啞教育とのみ言はんや。

Mute, sightless visitant;
　From what uncharted world
Hast voyaged into life's wide sea
　With guidance scant?
As if some bark mysteriously
　Should hither glide with spars aslant
And sails all furled!
——————*Edmund Stedmar's*
ODE TO HELEN KELLER.

（丁）

ちる花にかけし心のしがらみも
なつになる瀬のおさそすゞしき

家庭

滋養の品々

札幌　新渡戸稻造妻まり子

同病相憐むは自然の人情にして、己れの病床の上に得たる經驗は、他の人々にも分ちて、多少の利益ともなれかしと願へり。余は久しく病に罹りしより、病者に適當なる食物の種類、又其調理法等の問題を講究するの甚だ必要なるを感じたり。消化作用の不良は、何れの國にも聞く所にして本紙の讀者諸君も、必ず我國に於ても然りと答ふるに躊躇せられざるべし。其源因に至ては醫學者の答ふべき所なれば此に略さん。只余が記するものにして世に多少の裨益を與ふるとあらば望外の幸なり。」曾て我國に數年の經驗を有せる一獨逸醫師の言に、「吾が患者を取扱ふに當り最大困難を感じたるは適當の食物なきことなり。適當なる食物の調理法を知る者は殆ど數ふるに足らず。」と。亦以て斯る記事を本紙に寄するの不要の業に非らざるを

信ずるなり。
先づ此より非常に衰弱せる患者に適應すべき液躰食物の調理法を述ぶべし。
液躰食物とは、普通牛乳及びソップ類なるが、偖て其一種のみを用ふべきか、果た兩者共に用ゆべきかは、主治醫の指揮によりて、定むるを當然とす。
液躰食物のみを與ふる塲合に於ては、毎二時間に規則正しく與ふるを普通とす、然れども殊に衰弱せる病人にして、一回の量極めて少量ならざるべからざる塲合に於ては、醫師の命により二時間目毎よりも尙ほ屢々與ふるとあり。
若し牛乳のみを專用せんとせば、宜く左の件々に注意すべし、余が知人中牛乳のみを專用して、營養を得、生命を保持せんとするに要する適量に關して謬見を有する者甚だ多きを見る。元より重患にして衰弱甚しき者は、通常の適量を攝る能はざる塲合あるべしと雖も、大人にして一日僅に三合又は五合の牛乳のみを以て、其營養を得んとを望むが如きは、猶ほ木によりて魚を求むるが如し去かも。實際斯る不足の量を以て充分なりと誤信せる人々の多くあるは、屢々見聞する所にして、甚だ危險なる謬見と言はざるべからず、大人に在ては一日牛乳一升五合内外を要する者とす、左表によりて之を知るを得るべし。
此表は友人農學士大島金太郎氏が特に余の爲めに計算せられたる者なり。

	一日に要する養分量（匁） 蛋白質	脂油	炭水化物	一日に要する牛乳量（合）
中等勞働男子	三一、三九	一四、九〇	一三三、〇	一八、八
仝　上　女子	二四、四七	一一、七〇	一〇六、四〇	一五、〇
老たる男子	二六、六〇	一八、〇九	九三、一〇	一六、三
仝　上　女子	二一、二八	一三、三〇	六九、一六	一二、七

附言前表中養分標準量は、獨逸ミユンヘン大學教授フオイト博士の獨逸人に就て算定したる者より、改算せる者なれば、直に取て以て本邦人に適用すべきに非らず。蓋し邦人は歐人に比して、其躰量殆ど六分の一なり。然れども其差大なるに非らざれば、其躰量の比例に準じて、養分量を算出して誤りなきを信ず。牛乳量は標準量の蛋白質量をば算定したる者なり。元來牛乳は其滋養率狹隘に失する者なれば、適當なる比率を得んには、砂糖の如き無窒素物を加用せざるべからざる者と知るべし。

患者によりては冷乳を飲用するときは、或る吐瀉を催し左なくとも消化不良なるとあり、斯る時は之を少く温めて用ふべし。牛乳を温むるには之を沸騰せざるを要す、蓋し牛乳は攝氏

七十五度(華氏百六十七度)以上に熱するときは大に其性質を變ずる者なればなり。生乳は多少催痢性を有する者なれば患者の狀態により、之を沸騰して其性を消滅せしむるの必要あり。斯る時には余の經驗によれば大凡三十分間沸騰せしむる時は、單に沸騰せしめて直に火より取り去れる者よりは、其風味及其効に於て優れるを覺えたり。牛乳は焦げ付易ければ、長く沸かすときには能く注意すべし。

有害病毒を殺滅するの目的を以て、所謂殺菌法を行ふには、牛乳を沸騰せしむるに及はず。攝氏七十一度、即ち華氏百六十度迄熱するを以て足れりとす。我國の家庭に於て、充分なる効果を奏すべき簡便法は雪平に牛乳を入れ、之を冷水を盛れる鍋の中に入れ炭火を以て前記の温度に熱すべし。如此するときは沸騰點に至らしむるの患ひなし。時々寒暖計を挿入して、其適度を計るべし。寒暖計を有せざる人に於ては、普通の燗德利の新鮮なる者に牛乳を入れ、之を沸騰せる湯中に投入すると五分間、猶ほ酒燗をなす如くなすべし。余は經驗により、此方法の頗る適切なるを知れり、牛乳の容器は陶製或は玻璃製に限るべし。外國に多く行はるゝ陶藥塗りの器具

(Agate-ware, Blue white German ware)を最も宜とす。出來得べくんば牛乳容器は、專用として他物を煮るに用ゐざるを可とす。牛乳は空中より惡臭、其他汚穢物を吸入し易き者なれば、密閉せずして放置すべからず。其容器の如きは、務めて清潔なるを要す。之を清潔になすには、單に丁寧に洗滌するのみならずして、必ず熱湯を注ぐことを、忘るべからず。牛乳は人類の食物として、最も完全なる者なれども不注意なるときは惡變して、其害を人身に及し易きものも亦之に如く者なし。下痢又は之に類似の病症を患ふる人には、熱乳或は冷乳を與ふべからず。蓋し極端の温度にある牛乳ハ、催痢作用を增進するの傾きあればなり。

また故に沸煮せる牛乳は飲用するに先ち之を冷却し又已に過度に冷却せる者には、微温を與ふべし。牛乳を飲用するに當り陷り易き過は充分咀嚼せずして呑み下すことなりとす。如此するときは屢々胃の受け入る所とならずして、吐瀉するの虞あり。之を矯めて、食匙を以て取り、猶ほ固形食物を食ふが如くし、一合を飲むに少しづゝ數分間を費やさしむるに如くなかるべし。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

また胃弱を患ふる人は左の調理法を試みらるべし。

蛋白及び牛乳

鷄卵一個の蛋白を、牛乳一合乃至一合半に混じ、之を清潔なる瓶に入れ、一分間位強く振動すべし、充分泡立つを度とす。雞卵全部を牛乳と共に混ずるときは更に滋養に富める者を得べし。之をなすには先づ蛋白と卵黄とを別ち、卵黄に砂糖茶匙一を加て能く交ぜ合し次に蛋白を別器に於て、泡だちて白雪の如き堆積をなすに至る迄かき混ぜ之を卵黄と砂糖との混合物に徐々に混じ牛乳一合計を加へ、普通コップ一杯にすべし。

一茶匙とは六十滴を入るゝ容積の謂ひにて、即ち一「グラム」なり又一食匙とは四茶匙にして、即ち一「オンス」なり。

「エッグノッグ」(玉子酒)

前法と均く只異なる處は、蛋白及牛乳を加入する前に、卵黄と砂糖との混合物中にブランデー食匙一ッを、能く攪拌しつつ加ふるにあり。

「ミルクパンチ」(牛乳酒)

通常のコップにブランデー食匙一ッを入れ、之に茶匙一の砂糖を加へ、後ち温めたる牛乳一合を空氣の進入を助くる爲め可成上方より注加すべし。

以上兩者は興奮性なるブランデーを混用することなれば、醫師の許可なくして飲用すべからず。又之を飲用するとするも一日に一二回より多く用ふべからず。其前後には單純なる牛乳を用ゐるを可とす。

牛肉ソップ

牛肉一斤を取り、成可細に切斷し、雪平或は廣口の瓶に入れ冷水二合半及食鹽茶匙四分の一位を加ふべし、木製の匙を以て能く攪拌し(鐵製の鍋又匙の如きは決して用ふべからず)後ち蓋をなして、冷かなる塲所に二時間放置すべし。斯くするときは肉中の滋養液は、水中に浸み出づべし。已に二時間を經過せば、冷水を盛れる鍋の中に雪平を入れて熱すべし、鍋の水沸騰するに至る頃にはソップは充分出來上るなり。此時に至らば肉は小片をも通過せしめざる程の目を有する篩にて濾過すべし、肉中の滋養物は惣てソップ中に浸出する故に、篩の上に殘れる滓は、食物として價値なき者なり。脂油は胃弱の人には殊に不消化なるものなれば、之れを除去せざるべからず。除去するにはソップの未だ冷却せずして熱き間なれば、清潔なる半紙の一片をソップの表面に載せ靜かに引き去

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

るべし。此くするときは上方に浮び居る脂油は、半紙に附着するなり。又ソップ已に冷却せるときは脂油は凝固して浮び居るを以て、匙を以て之を取り去るを得べし。ソップは飲用するに先ち少く温むるを良とす、決して沸煮すべからず。沸煮するときは、肉中の蛋白質は雞卵の蛋白質と均く凝固して容易く消化せざるに至るなり。之を温むるには、牛乳を温むるときの如く、水を入れたる鍋に其容器を入れて熱し、直火にて熱すべからず。寒暖計を有するときは攝氏七十一度（華氏百六十度）以下に於てし、飲用者の口に適するを適度とす。

雞肉ソップ

雞の片身（骨肉共にて殆ど二斤位）を細に切り、殊に骨部を敲き砕くべし。之は骨中の膠質を容易に溶出しめん爲めなり。細に砕き終らば、之を雪平に入れ、冷水一升を加へ、徐々に熱して沸騰すべし。沸騰し始めなば浮び來る滓を掬ひ取るべし、之を掬ひ取らざれば、ソップに苦味を付することあり。二時間沸煮せる後食塩茶匙一ッを加ふるときは、大に其風味を増進す。ソップを沸して、決して強烈になすとなく、終始徐々になすを必要とす。如此くして煮熟すると三時間に至らば、篩にて濾し、冷却せしめて脂油を掬ひ取るべし。飲用する人の嗜好に從ひて、塩胡椒を加ふるも妨げなし。飲用するに先ち用ゆる丈の分量に微温を與ふべし。又脂油を取り去りたる後に食匙一ッの米を加へ、更に半時間徐々に煮熟するも宜し。セレリーの風味を好む人は米と共にセレリー少量を入れて煮るべし。液躰食物のみを用ゆる患者には、米及野菜類は濾して後ち用ふべし。

家庭養蠶の樂

さくら

今年も亦養蠶の時節となり、我邦全國到る處に、かの蠢爾たる蠶は、饒に國家の大富源を肥しつゝあるなり。養蠶の事業の高尚なるは今更いふまでもなく、故英照皇太后陛下の如きは、春は青山の御所にて、御手づから女官等と共に此業を勵みたまひしとか聞き及べるは、此際に特更に思ひ出でられてゆかしく感ぜらるゝなり。養蠶は其性質上まことに婦人の職業として最も適當に、其爲に天然の備へたるものなるが如く

に覺え、婦人家を興し、國を富ますの道、之を以て第一となすべし。

一家の產業の爲めに、または主婦が小遣錢取りの爲めに、養蠶に從事せんことは、頗る奬勵すべきことなるが、此に單に收利の目的ならざるも、なほ家庭の樂の一助として、主婦たるもの多少の養蠶をなさんこそよけれ。試みに庭園もしくは垣根に兼て植付けたるか、もしくは他より買入れたる多少の桑葉を以て、一枚半枚の種紙より養蠶せんに、其樂しみやいひ難し。先づ五月初旬の掃立の頃は、髮の毛切れの程に、さゝやかなるが、初眠、二眠、三眠、四眠と一週また一週と日數立ち行く程には、其度每に衣を脫ぎつゝ生長し、恁て上りの頃には、小指の大きさ計りにもなり、いよ〳〵上りとなれば、藁苞または紙袋の中にて、美しきこと白金の如き糸を吐かしめつゝ、また一週間も經れば見事なる繭となれるを見るの喜びあつて、一先づ養蠶の業は終る。此間夫妻、親子、兄弟相助けて、桑を摘み、之を與へ、虫の日ましに生ひ立つを見ることは、家庭に和樂の空氣を充滿せしむるの便りとなるなり。養蠶に要する一大事は、家庭の和樂なりとさへいひし人さへもあるなり。

繭既に成りて、また之を煑て糸を製する時の樂しさ、彼の芋虫の如き虫と、桑の嫩葉とが、今や變じて、美質の絹糸となり、而も我家にて出來たるものと思へば、一層に美しく、また佳くも思はるゝも樂しみなり。また惡しき繭よりは、極めて丈夫なる引出し糸を得べく、また眞綿ともなすべし。かくそれ〳〵に處置をつけたる後の成績を見れば、三四十日間の日夜の勞力は、充分に酬いを獲たるが如くに感じ、假令、此養蠶の爲に要したる費用は、市にて其結果丈のものを購ふよりも餘計に要したりとても、之が爲めに得たる快樂は、價を以て得らるべきものに非ず。

扨て既に糸を製したる後には、また一層の樂しみあり。細君もし家に一臺の機を所持して、自ら織立つることを得んには、彼自製の絹糸を以て、絹物を織るとも、或は又之を金巾糸、カス糸等の間に割り込むかして、縞柄等も自から工夫して基作りをなし、暇每に梭を取り、杼を通はして、恁て出來上りたる反物を良人小兒、若しは自己の用に裁縫して、着用するまでとなれば、其時の愉快や實に言ひ難きものあらん。かく

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

の如くにして出來たる衣裝は、丈夫にもあり、また經濟向きにもなり、殊に其家庭に於て成りたるものなりと思へば、之に多分の情味は籠れり。糸を採ることより、織ることより、縫ふことまで皆な母の苦勞に成りたる衣服を身に纒ふ時には、母が温き慈愛其者を着くるが如くに感ぜられん。また如斯き衣服を子に着せる母、夫に着せる妻の樂しみや如何りなるべきぞ。和氣自ら其中に溢れて、快味盡きざらん。

◎出産日取早見表

月經ノ終リタル日	出産スベキ頃
一月一	十月八
同二	同九
同三	同十
同四	同十一
同五	同十二
同六	同十三
同七	同十四
同八	同十五
同九	同十六
同十	同十七
同十一	同十八
同十二	同十九
同十三	同二十
同十四	同二十一
同十五	同二十二
同十六	同二十三
同十七	同二十四
同十八	同二十五
同十九	同二十六
一月二十	十月二十七
同二十一	同二十八
同二十二	同二十九
同二十三	同三十
同二十四	同三十一
同二十五	十一月一
同二十六	同二
同二十七	同三
同二十八	同四
同二十九	同五
同三十	同六
同三十一	同七
二月一	同八
同二	同九
同三	同十
同四	同十一
同五	同十二
同六	同十三
同七	同十四
二月八	十一月十五
同九	同十六
同十	同十七
同十一	同十八
同十二	同十九
同十三	同二十
同十四	同二十一
同十五	同二十二
同十六	同二十三
同十七	同二十四
同十八	同二十五
同十九	同二十六
同二十	同二十七
同二十一	同二十八
同二十二	同二十九
同二十三	同三十
同二十四	十二月一
同二十五	同二
同二十六	同三
同二十七	同四
同二十八	同五
三月一	同六
同二	同七
同三	同八
同四	同九
同五	同十
同六	同十一
同七	同十二
同八	同十三
同九	同十四
同十	同十五
同十一	同十六
同十二	同十七
同十三	同十八
同十四	同十九
同十五	同二十
同十六	同二十一
同十七	同二十二
同十八	同二十三
同十九	同二十四
同二十	同二十五
同二十一	同二十六
同二十二	同二十七
同二十三	同二十八
同二十四	同二十九
同二十五	同三十
同二十六	同三十一
三月二十七	一月一
同二十八	同二
同二十九	同三
同三十	同四
同三十一	同五
四月一	同六
同二	同七
同三	同八
同四	同九
同五	同十
同六	同十一
同七	同十二
同八	同十三
同九	同十四
同十	同十五
同十一	同十六
同十二	同十七
同十三	同十八
同十四	同十九
同十五	同二十
同十六	同二十一
同十七	同二十二
同十八	同二十三
同十九	同二十四
同二十	同二十五
同二十一	同二十六
同二十二	同二十七
同二十三	同二十八
同二十四	同二十九
同二十五	同三十
同二十六	同三十一
同二十七	二月一
同二十八	同二
同二十九	同三
同三十	同四
五月一	同五
同二	同六
同三	同七
同四	同八
同五	同九
同六	同十
同七	同十一
同八	同十二
同九	同十三
同十	同十四
同十一	同十五
同十二	同十六

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

五月十三 同十四 同十五 同十六 同十七 同十八 同十九 同二十 同二一 同二二 同二三 同二四 同二五 同二六 同二七 同二八 同二九 同三十 同三一 六月一 同二 同三 同四 同五 同六 同七 同八 同九 同十 同十一 同十二 同十三 同十四 同十五 同十六 同十七 同十八 同十九 同二十 同二一 同二二 同二三 同二四 同二五 同二六 同二七 同二八

二月十七 同十八 同十九 同二十 同二一 同二二 同二三 同二四 同二五 同二六 同二七 同二八 三月一 同二 同三 同四 同五 同六 同七 同八 同九 同十 同十一 同十二 同十三 同十四 同十五 同十六 同十七 同十八 同十九 同二十 同二一 同二二 同二三 同二四 同二五 同二六 同二七 同二八 同二九 同三十 同三一 四月一 同二 同三 同四

六月二九 同三十 七月一 同二 同三 同四 同五 同六 同七 同八 同九 同十 同十一 同十二 同十三 同十四 同十五 同十六 同十七 同十八 同十九 同二十 同二一 同二二 同二三 同二四 同二五 同二六 同二七 同二八 同二九 同三十 同三一 八月一 同二 同三 同四 同五 同六 同七 同八 同九 同十 同十一 同十二 同十三 同十四

四月五 同六 同七 同八 同九 同十 同十一 同十二 同十三 同十四 同十五 同十六 同十七 同十八 同十九 同二十 同二一 四月二二 同二三 同二四 同二五 同二六 同二七 同二八 同二九 同三十 五月一 同二 同三 同四 同五 同七 同七 同八 同九 同十 同十一 同十二 同十三 同十四 同十五 同十六 同十七 同十八 同十九 同二十 同二一

八月十五 同十六 同十七 同十八 同十九 同二十 同二一 同二二 同二三 同二四 同二五 同二六 同二七 同二八 同二九 同三十 同三一 九月一 同二 同三 同四 同五 同六 同七 同八 同九 同十 同十一 同十二 同十三 同十四 同十五 同十六 同十七 同十八 同十九 同二十 同二一 同二二 同二三 同二四 同二五 同二六 同二七 同二八 同二九 同三十

五月二二 同二三 同二四 同二五 同二六 同二七 同二八 同二九 同三十 同三一 六月一 同二 同三 同四 同五 同六 同七 同八 同九 同十 同十一 同十二 同十三 同十四 同十五 同十六 同十七 同十八 同十九 同二十 同二一 同二二 同二三 同二四 同二五 同二六 同二七 同二八 同二九 同三十 七月一 同二 同三 同四 同五 同六 同七

十月一 同二 同三 同四 同五 同六 同七 同八 同九 同十 同十一 同十二 同十三 同十四 同十五 同十六 同十七 同十八 同十九 同二十 同二一 同二二 同二三 同二四 同二五 同二六 同二七 同二八 同二九 同三十 同三一 十一月一 同二 同三 同四 同五 同六 同七 同八 同九 同十 同十一 同十二 同十三 同十四 同十五 同十六

同八 同九 同十 同十一 同十二 同十三 同十四 同十五 同十六 同十七 同十八 同十九 同二十 同二一 同二二 同二三 同二四 同二五 同二六 同二七 同二八 同二九 同三十 同三一 八月一 同二 同三 同四 同五 同六 同七 同八 同九 同十 同十一 同十二 同十三 同十四 同十五 同十六 同十七 同十八 同十九 同二十 同二一 同二二 同二三

同十七 同十八 同十九 同二十 同二一 同二二 同二三 同二四 同二五 同二六 同二七 同二八 同二九 同三十 十二月一 同二 同三 同四 同五 同六 同七 同八 同九

同二四 同二五 同二六 同二七 同二八 同二九 同三十 同三一 九月一 同二 同三 同四 同五 同六 九月七 同八 同九 同十 同十一 同十二 同十三 同十四 同十五

十二月十 同十一 同十二 同十三 同十四 同十五 同十六 同十七 同十八 同十九 同二十 同二一 同二二 同二三 同二四 同二五 同二六 同二七 同二八 同二九 同三十 同三一

九月十六 同十七 同十八 同十九 同二十 同二一 同二二 同二三 同二四 同二五 同二六 同二七 同二八 同二九 同三十 十月一 同二 同三 同四 同五 同六 同七

講義

茶の話

小農夫

春は半ばにもなり、千万の木にも草にも、新しき緑の色を鮮かに装はんとす。凡て木の芽の萌え出づるは、いと心地よく、氣も伸びやかに感ぜらるゝものなるが、其中にも分けて、桑の芽、茶の芽の、製茶養蠶の業を起して、國の寶をなし、民の富みを致すは、皆これ春天の惠澤、謝すべきかな。我國の富源をなすもの、實に此二者を重しとして、而して國民は今や此春時に際して、全國到る處に此二業に勵み、桑摘む女の歌は、茶摘む女の歌に和し、暫くにして蠶、鮮麗の絲を吐かんとすれば、また新茶の馥郁たるは、雅客を醉しめんとせり。

◎茶は日本全國到る處に産出せざるなく、其産出高一年、七百八十八万三千二百三十二斤に上り、また之を海外に輸出するの量は一年、六百九十万、一千二十八斤に至る。

◎如斯に我國の一大富源たる茶の由來を尋ぬるに、太古は邈焉として尋ぬべからず、之に關する事蹟の史乘に見え初めたるは、今を去る千二百年以前、聖武帝天平元年百僧を禁中に集へて讀經せしめらるゝに、其第二日目に行茶と稱して、茶を下賜せられたり。此時代及製茶の法は、如何樣にせしものやらん、詳かならず。また其茶は本邦自産のものなりしか、果たまた唐土より渡來せしものなるか、知るべからず。されど多分は此時分必ずや既に茶樹製茶法共に支那より傳來せしものありしなるべし。

◎後延暦廿三年に至り、僧最澄入唐して歸朝するや、茶種を携へ歸りて、之を比叡の山麓に植ゑたり、今の近江坂本の麓

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

なる池上の茶園といふもの、これなりといふ。

◎嵯峨天皇の時に至り、弘仁六年四月、上、近江國滋賀韓崎に行幸せられし時、崇福寺大僧都永忠自ら茶を製して、上及び皇太弟に奉りしに、上之を嘉して詩ありしといふ。永忠は之より先き寶龜年中に入唐留學せしものなれば、製茶及び茶樹栽培の法を得て歸朝し、自ら之を試みたるものなるべし。また詔して茶を、畿内及び近江、丹波、播磨の國々に植ゑしめられしといふ。

◎醍醐天皇延喜二年仁和寺の朝覲行幸し給ひし時、御茶二盞奉らしめ玉ひしよし國史に見え、また西宮記には、後白河法皇安元二年、五十の御賀の康和に嘉例によりて、大内より御茶參らせ給ひしよし見ゆ。

◎土御門天皇の建久二年四月今去七百余年に至り、建仁寺の千光國師榮西上人の唐より歸るや、江南の地より、茶種を齎し、之を筑前(今は肥前)背振山及び聖福寺に下種し、以て茶を製し、之を岩上茶と稱し、後其製式を製し、喫茶養生記なるものを著したり。東鑑には、建保二年二月廿四日將軍實朝病あり、建仁寺の僧榮西、良藥と稱して、煎茶を獻り、喫茶養生記を添へたるよし見えたり。

◎榮西また其種子五粒を山城國栂尾の明惠上人に贈りしが、其時茶種を入れたる小壺を漢小柿といひ、今尚栂尾寺の什物たり、明惠は彼種子を、栂尾山の深瀨其他に植ゑ、茶を製したり。また地を相して、山城國宇治に分ち栽ゑたり、此時植うる者茶株の距離何程にすべきかを知らで、上人に問ひしに、馬に打ち乘りて、畑を走り、其蹄形の跡に植ゑしめしといふ、今宇治の木幡に駒の足影と唱ふる茶園は、其遺蹟なりとぞ。其時明惠の詠みし歌といふに、

　栂山の尾の上の茶の木分け植ゑて
　　迹ぞ生ふべし駒の蹄影

とあり、次で山城仁和寺、醍醐、葉室に移し、また大和の室尾、伊賀の服部、伊勢の河居、駿河の淸見、武藏の河越等に植ゑたり。

◎日本茶の起原をいふもの、多くは榮西明惠に始まるといふといへども、其實、此二人は茶をして今日まで引續き盛りに栽培製造せしむるに於て大功ありしものなり、明惠の茶を宇治其他に植ゑたるもの、斯業に於て頗る稱すべきの功績なり

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

とふべし、宇治の人民は、今に至るまで、明恵を徳として、毎春、新茶を高山寺に捧げて、上人の祠堂に供養すといふ。

◎本邦の西南地方に至れば、もとより野生の茶樹なきに非らざれども、人民昔は之を知らざりしものゝ如く、されば今に於ても著名の茶園は多くは、支那より齎したる種子より、逐次繁殖したるものなり。而してこれが輸入者となりしものは、實に入唐留學したる多くの僧侶なり。

◎支那にては、茶は太古より賞翫せられしものと見えて、詩經爾雅にも檟、苦茶などいふ文字出でたり。支那文字にては、茶の別名に數多あり、檟といひ、苦茶といひ、荈といひ、蔎といひ、茗といひ、過羅といひ、清人樹といひ、穆陀樹といひ、皐盧といふ。支那茶は閩中を最とし、其中にも建安の北苑の産唐宋の時代より第一の名あり。

◎支那にて茶のよきを武夷の茶といふ、我朝にて宇治茶といふが如し。武夷山は山川秀麗にして、茶樹繁茂する處とぞ。宋の范文正公も詠じて、溪邊の奇茗天下に冠たり、武夷の仙人古へより栽うといへり。栂尾の風景は武夷に髣髴たり。其茶は色香滋味殊に群を出でゝ、扶桑最上の佳品のよしに、賣茶翁曾ていへり。

◎また爾雅の註には、早採者爲レ茶、晩采者爲二茗荈一と見えたれば、製茶、支那にはいと古き事なりしが、唐の時代に至りて、群國の産出、愈多く、百姓は頗る其利潤を蒙りしものから、建中年間に、趙贊の建言によりて、十分一の稅金を之に課することゝなしたり。

◎唐の陸羽は甚だ茶を翫ぶことを喜んで、支那の茶道は、彼によりて開けたりといふべし。其著茶經は、茶道家の重んずる所なり。陸羽は我朝桓武帝の時に卒す。

◎元中年中（去今五百餘年以前）時の將軍足利義滿、其臣大內義弘をして、茶を宇治に植ゑさせ、醍醐、栂尾と並びて、茶園の三佳地と定めて、盛んに茶を翫びしより、諸國の地頭領主等、亦盛に之を奬勵せり。此際、西南諸洲の山間に天然自生の茶樹あることを發見したれども、なほ異種となして、其地方々々の人民ならでは、之を用ゐるもの稀なりしとぞ。

◎足利義政また甚だ茶を好み、義滿と共に、茶史上の二名物たり。而してこの二人者驕奢度なきは、一箇の茶器に數百千金を費すに至れり。紹鷗、利休等の茶は、詫なり、閑寂を樂しむ

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

に在り。然れども二將軍の如きは、酒池肉林に飽きて、茶の淡泊なるに贅澤をきめこんで、心をやりしものならん歟。

◎本朝茶の湯の濫觴は珠光なり。珠光は後土御門院の文明年間(今去四百二十餘年)の人にして、南都稱名寺の邊に住せしが、一休和尚に參禪して、教外別傳の旨趣を悟り、常に爐中に茶を煮て禪味に耽りしが、足利義政この由を聞き、召して師範となし、初て茶禮の式を立てたり。

◎珠光之を宗悟に傳へ、宗悟之を紹鷗に傳へ、紹鷗之を宗易に傳ふ。宗易は即ち千利休なり、利休に至りて茶道は大成したりと稱すべし。利休以下統傳を受くるもの、一工夫を立つるに由りて、別派を開くもの多く、茶道の流派に、利休流(今は千家といふ)、裏家、武者小路家、有樂流、織部流、藪内流、遠州流、石州流、金森流、宗偏流等あり。

◎夢窓國師の夢中問答に曰く、昔盧仝、陸羽が茶を好みけるは、困睡をさまし、學を嗜まんが爲めなり。栂尾の上人、建仁の開山、茶を愛し玉ひけるは、鬱を散じ、道行をなし玉はんが爲めなりと。

◎彼二僧のみならず、珠光、紹鷗、利休等の茶は、同じく道行を果すの便りとなし、禪味を樂まんが爲めなりき。茶道は即ち禪の一法なり。其禮法はまた禪家隱遁の躰を摸し、質樸閑靜を學びたるものにて、宗匠をも昔は和尚といひたり。

◎利休の茶室は四疊半、六人僅に膝を容るゝに足りしのみ、されどこの隘室によりて、茶に隱るゝときは、彼は六合の大々裡中に無碍の上下をなせしなり。

◎利休に或人座敷はいか樣なるが好きぞとたづねしに、うめ木の多きが面白しとこたへたりといふ。

◎信長茶を好み、嘗て京都の妙顯寺にて、京堺の茶人十八人に、御茶を下されしことありしが、これも利休が立てしなりといふ。信長の茶は政治なりしか。

◎昔下京に福阿彌といふ貧しき者ありけり、明暮茶をのみ、此世の樂しみとなせしが或年の元旦にかく詠ぜしとなん。

　　煤はかず門松たてず餅つかず
　　　かゝる家にも春は來にけり

彼の春は茶の中にあり、壺中別有天地を、眞に味ひしものなる歟。

◎古來、茶に隱れたる者とて、世に稱せらるゝは、賣茶翁な

り。翁は肥前の人、また高遊外ともいふ。初め郷に在りて僧侶たりしが、袈裟の德に誇りて、人の布施を煩らはすは、自ら善くするものゝ志にあらずとして、平安に來り、茶を賣りて、其飢を助けたり。春は花の陰に、秋は紅葉の下に、茶を荷ひて、之を賣りたり。蓋し翁の志は茶に有らずして、茶を名とし、其實は托鉢なり、修行なりき。されど煎茶の道、此翁によりて大に備はり、此道の人尊めて茶神となす。翁は彼奇行ありしにも拘らず、平居は頗る綿密の行ひありしとぞ。

◎翁其錢筒に題して、

隨處開茶店、一鐘是一錢、生涯唯筒裏、飢飽任天然

といひ、また

莫茶日々起松風、醒覺人間仙路通、要識盧仝眞妙者、
傾囊先入箇錢筒

など、其他樣々の偈を書したりといふ。また茶を煮る席に書付けたるざれ言には

茶錢は黃金百鎰より半文錢まではくれ次第たゞのみも勝手
たゞよりはまけまうさず
達摩さへおあしで渡る難波江の

ながれを汲める老のわが身ぞ

とありしとぞ。先年小說家涙六、向島の花時に涙六茶屋を開きしは、賣茶翁の眞似事なり。其看板にも彼ざれ言に似せたるものを書き付けありたり。

◎太古に在りて、神農氏民に醫藥を敎へんが爲に百草を嘗む。嘗て一日にして七十毒に逢ひ、茶を得て之を解きたりと。藥を飲む時、茶を飲まざるは、藥氣を解せんことを恐れてなり。神農食經には、茶茗久しく服するに宜し、人をして力有て、志を悅ばしむとあり、また神農本經に曰く、茶味苦し、之を飲めば人をして志を益し、眠少く身を輕くし、目を明かにすとあり。

◎茶經に曰く、茶の性至て寒なり、最も精行儉德の人に宜し、蓋し熱渴し、凝悶腦痛、目澁く、四支煩く百節舒びざるとあらば、四五啜すべし、醍醐甘露と衡を抗すべし。

◎天臺山記には、茶少しく服すれば、翼を生ずとあり。また陶弘景は茶は身を輕くし、骨を換ふといへり。

◎榮西上人の喫茶養生記の序に曰く、茶は養生の仙藥也、延齡の妙術なり。山谷之を生ずれは、其地神靈なり。人倫之を

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

擽れは、其人長命なり。天竺唐土同じく之を貴重す。我朝日本亦嗜賞す、古今奇特の仙藥摘まずんばあるべからずと。

◎英國醫師合信氏の上海に於て刊行したる内科新説に曰く、茶は能く精神を補ひ、睡を驅り、渇を解き、功力酒に勝る。綠茶の功力は、紅茶に較ふれば、更に勝れりと。

◎我朝の和歌和文、茶の事をいふもの殆どあるなし。多く之をいふもの、俳諧あり。茶の字には和訓なし、木の芽、かぐの芽などいふ雅言あれども、未だ多く和歌に讀みならされず。茶の音また歌に添はず。

◎支那には唐宋以下、茶の詩賦詞章に顯はるゝもの極めて多く、また以て風騷の好題目たり。

◎白樂天歌ふて曰く、酒渇春深一盃茶と。

◎蘇東坡に葉嘉傳あり、葉嘉は茶の別名也。其傳中に、葉嘉は風味淸白にして愛すべしといひ、また眞に淸白の士なり、其氣飄然として浮雲の如しともいへり。

◎元の揚維楨の淸苦先生（茶の稱）傳に曰く、先生の人となり、芬馥にして爽朗磊落疎豁、世に媚びず、俗に阿らずと。

◎東坡また茶を論じて曰く、煩を除き膩を去る、世固より茶なかるべからず。食已んで、輙ち濃茶を以て口を漱げば、煩膩既に去りて、而して脾胃凡ならず。肉の齒間に在るもの、茶を得て漱浸すれば、脫去を覺えず。刺挑を煩はさずして、而して齒性苦に便なり、此に緣りて漸く堅密、蠹病自ら已む。然れども、率ね中下の茶を用ゐ、其上なる者は亦常に有らず、數日を隔てゝ一啜すれば、亦害を爲さずと。

◎東坡は茶の齒に益あるをいへども、近頃學上の一說によれば、茶は消化困難の有力なる原因にして、唾液の刺劇性を增加するによりて、腐疽を增盛し又茶の最大成分たるタンニンの爲めに齒齦を收斂して、齒を害するに至るといへり。

◎茶德を頌するもの古來擧けて數ふべからず。然れども茶また害なきに非ず。沼義信の簡易養生記に茶毒に中りたるには、梅干を喫してよしといへり。

◎日本茶は宇治、第一の名あり、宇治にても大鳳寺の產最も勝れ、木幡なるは之に次ぐとぞ。また小倉の邊をは宇治の西方といひ濃淡の茶品を專らとし、池尾を東方といひ、煎茶品を多く出す。

◎茶樹は古株を貴びて、一度植えたるものは地を換へず。茶

舗の看板廣告等に、宇治古園など書したるは、これか爲めなり。茶を植うるの地は赤土を第一とす。

◎本邦の中部及び四國九州の山間には、自生の茶樹多く、製茶の業、今は其等の地方に盛んなり。其主なるものを擧ぐれば、日向の高千穗、椎葉、肥後の玖摩、八代、山鹿、筑後の生葉、上妻、豊前の上毛、田川、豊後の大野、直入の諸郡、四國は土佐の諸郡、伊豫の久万山、阿波の粗山、中國は周防、石見、美作、紀伊諸州の山脉に在り。以上諸地方の人民は、夏時林藪を伐剪し、其枯燥するを俟つて、之を焚燒すれは、翌春其跡に茶樹發生す。之をば三年を經たる後より摘み始めて、製造するなり。

◎夫れ茶に味ありてまた味なし、日々の水勢に在り、また湯に在り、湯は火にあり、火に死活あり、水に死活あり、湯に熱湯老湯あり、活火を以て、活水を煑、而して熱湯を得ずんば、茶の眞味得がたし。

◎焔氣の有るを活火といひ、是なきを死火といふ。又焔氣四方に別れば、火勢別れて、勢弱し、焔氣聚つて正中に火勢の昇るを要とす。また火勢を盛んならしめんとして、火種を用ゐると多ければ、急に過ぐるのことありて佳からず、急火は一時に昇りて、また衰へ、爲めに老湯を生ずべし。要は火勢の不急不緩を計りて、熱湯に至るを佳とす。

◎炭は池田炭を佳品とす。切炭に寸法の定めなけれども、太ければ力餘り、細ければ力足らず、爐によりて大小捨用し、三四本斜に組んでよし。

◎茶經に曰く、山水乳泉石池の漫流するものは上なり、江水は、人を去ると遠きを取り、井水は汲むこと多きものを取るとあり。これ活水を求むるが故なり。雨水、雪水はよろしからず、また陰濕の氣多きは不可なり。

◎茶は渴を止むるものに非ず、飲に非ず、喫するなり。初碗香を賞し、二碗味を賞し、三碗其茶を賞すといへり。

◎摘茶の時候は八十八夜前後にして、其頃一時に摘むなり。茶師にては上品を覆下と稱へ、下品をシヤウ葉といふ。覆下とは、茶樹に覆をかけて、雨霜を凌ぎて育てたるものにて、玉露の類なり。シヤウ葉とは、さる保護を與へず、自然に萌え出てたる芽を製したるものにて、喜撰の類なり。晩茶とは、後れて摘むもの丶稱なり。古園の上茶にても、後れて摘みた

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

るも晩茶といふ。然れども通常は晩茶または番茶といひて下等のものとなし、人家の日用に供せり。

◎茶は白きを貴ぶ。漢土にては上茶を白茶といひ、下茶を苦茶といふ。

◎茶に團茶、碾茶、煎茶あり。また紅茶、烏龍茶といへるは、近來外邦より傳はりたる製法なり。

◎茶樹の種類は至りて少く、普通茶樹の外に、紅花茶、皐盧茶、大葉茶の三種あり。また茶の種類に非ずして、茶の名を得たるもの、枸杞茶、麥茶、河原茶、甘茶等あり。枸杞茶は、枸杞の軟芽を摘みて製し、味淡白にして、茶に甚だ紛らし。麥茶は麥の萌芽を摘み取りて製す、青臭くして、味ひ佳からず。河原茶は一名を一年茶といひ、河邊砂磧の地に生ずる、山扁豆の葉を用ゐて製す。中國筋にては、畑に作りて自家用に供す。甘茶には、山生、園生の兩種あり。園生のものは土常山と名付るものにして、味淡く下品なり。山生の甘茶は、蔓生にして、紋股藍より製す。味濃く上品なり。四月八日の灌佛會に用ゐるものこれなり。また備前地方にては、之を用ゐて、醤油の味を助くとぞ。

◎以上の外に桑茶は山城上津屋邊にて製して、下品の抹茶の色を助く。また山茶花の嫩葉を製して、同種の用をなさしむるもあり。其外雞兒腸、紫藤葉、柳芽を茶に交ぜて贋して賣却することもあり。

文藝

案山子廼舍諸社中詠草（承前）

池袋清風大人評點

雨中花　　高原照彦

しのゝめの花のしら雲しめりて小雨そぼふるみよしのゝ山

評　塵世忙殺中を去り汽笛一聲大和の高田に達し雙鞋一筇飄然として吉野に到り村翁を訪ひ茅店に一宿せば四圍閒として聲なく曉天偶鶯滴の夢境に響くに驚き起て柴扉を開けば一望滿山花咲々春雨霏々として懷古の涙を添へん此時の感情果して如何許者雨春涙華に在り渭雲の生郷大和の吉野川に添ひ其知友吉野山の邊に在り昔て予を訪ひ語るに山の春景を以てし契るに花時に來らば案内せん事を以てす而して今春予は既に三百里の郷里に在り志遂に成らず空しく東方を望て想像を馳せ徒に是等の歌を吟するのみ

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

、、閑中春雨　　東京　江間喜代子

しく／＼と軒の玉水おちろめて友なつかしきはる雨のころ

評　實に田中春閑の情をよく述へられたり雨中幽閑にして庭室雅興を増し自然雅友を思ふの情切也此詠者我社中男女を論せず最熱心家にして千凝萬障敢て屈せず出詠せし事十年一日の如し故に其間秀逸少なからず然るに才子多病の諺にや此數年間陸續重さ病にかゝり生死の間に出沒して在り將來多望の人却て無望さならんさす人世の賴なき今更如何さもすべからず而も斯人の速に健康に復せん事常に評者の祈る所たり

、月前花　　京都　福田美禾子

さく花はほのかに見て山の端にかすみわたれる月のかげかな

評　山上霞間月光靄然たる處更に櫻花の皎然たるを見る其幽美畫くさも成らず此詠者も少女にして歌才あり亦勉强の精神に富めり殊に健康にして目下東京女子高等師範學校に在り日課多忙卒業期近きに在り將來多望の女子也

、雨中雉子　　近江　望月なほ子

さわらびも今かもゆらん小雨ふるさくらが岡にきゝす啼なり

評　野外春雨の候の一種の感情あり花のこさはいはざるも櫻が岡を出したれば自然花をもまつ心あらはれたり此少女も歌才ありしさいへど其後家事の故障もやあらん熱心のあさ見えざるは惜むべし

雜錄

印度女傑ラマバイ女史
大飢饉遭難の實歷談

かもめ

昊天何の憤る所かありて、さなきだに強國民の羈軛に抑壓せられて、可憐無告なる印度人民を禍すること、爰に至るの甚しきをなすや。其地雨露久しく降らず、河水涸れ、人血亦乾き、五穀實のならず、黎民悉く菜色ありて、餓孚累々野に滿つ。慘怛の狀、聞くものをして、酸鼻に堪ざらしむ。酸鼻我に於て・倘ほ忍ぶべくも、たゞ彼餓死の民を如何せん。於玆乎、羽檄して、世界の諸邦、四海同胞の義、助けずんばあるべからずとして、義金を募りて救拯に奔れり。今回の飢饉は、主として、印度中央部地方に其暴力を逞しうするものなるが、今より二十年前即ち千八百七十六年にも、印度は一大飢饉の災厄に罹りしが、其時は主として、マドラ

ス、及南方マラッサの地方、數百万の人民は餓死の非運を遂げ、田園荒蕪し、其悲慘の狀現今に劣らざりしといふ。彼印度寡婦の救濟教育を以て任じ、可憐なる同胞の爲めに、其一身を獻牲せる該國當代の偉女傑、ラマバイ女史（明治二十二年我國に來遊せしことあり）の如きは、實に其父母兄弟と共に、當年の大飢饉の災厄を實歷し是が爲めに父母を喪ひ、また姉と別れ、刻々瀕死の危難を嘗めて、僅に天命を完うしたるものなりき。悪星再び廻り來りて、印度國民今日の大厄に逢ふや、ラマバイ女史、往年を回顧して、同情の涙の彼數百万の生靈將に飢死せんとするものに對して、灑がるゝものなきを能はず。由て女史近時、往年の災厄實歷談をものして、倫敦センチナル紙上に載す、蓋し多涙悲慘の文字なり。今之を抄譯して、左に錄して、一は印度飢饉の慘狀果して如何を知り、一はまた以て、彼印度國救世の女傑が生ひ立ちの事歷の一端を知らんとす。

* * * * * *

◎千八百七十六年の大飢饉時に際し、マドラス及び南方マラッサ地方の數百万の人民は餓死し、田園荒廢に歸したるの慘狀は、今日なほ諸人のよく記臆する處にして、此度またもや、中央部地方に大飢饉暴勢を逞しうするを聞きて、慘怛の情頗る禁ずる能はざるものありて、天に呼んで、我愛する此國民を助けんことを訴ふるものなり。

彼悲慘なる飢餓將に死を待つの人民を見て、自ら曾て飢餓瀕死の苦難を實歷し、而も之が爲に骨肉を喪ひたる妾の如きは、甚だ同情の念に堪へざるものあるなり。往年のマドラス地方の大飢饉は、千八百七十六年より其翌年に亘りて、其絕頂に達せしが、其始まりしは、少くとも其三年以前よりなりしなり。當時妾は未だ十代の丸で世間見ずの少女なりしかば、多くの人民が那計り其厄難と戰ひしか、さる事どもは、少しも知らず、さればまた記臆すべきやうもなけれど、但し、妾自家并びに二三の人々の家族の辛酸の狀を看、且つ、親しく之を嘗めて、人生の悲酸、人情の酷薄なるを知るに至りたり。」

當時最も甚しく辛酸を嘗めたるものは、上流の階級に在りて、貧困に而も勞働と貧苦とに馴れざる人々の家族にして、其辛酸悲痛、貧者下流の人民よりも一層悽然たりき。妾の父は、地主にしてまた高貴の博士たり、其學識あるの故に、家產の富榮を致したりしが、其晩年に及んでは老衰にかてゝ加へ

て盲目となり、爲に家産を蕩盡するの非運を招きたり。また兄姉并びに妾は嘗て世俗的の教育を受けたることなく、たゞ高貴なる宗教的生涯を送るに必要なる學問を受けたるのみなりしかども、階級に秀で、高尚なる學識あるを誇り、且つ虚榮を求むるの念ありしが爲めに、其種の職業を求めて、父母の貴重なる生命を救ふことを敢てせざりき。要するに我等は一の常識をも有せず、所有の金錢は、ブラミンの僧侶に布施して、我等が上に黄金を雨らして、富貴幸福を授くるものと妄信せる其神々を悦ばせんとするによりて、悉く之を失ひたり。また我等は處々の聖地、殿堂を巡りて、異なる神々を拜し、また神泉に浴して、我等をして貧困なるに至らしめたる罪と呪ひとより免かれんが爲めに垢離を取りたることもあり。妾の兄はまた數ヶ月間の斷食をなせしが爲めに、其健全勇壯なる身躰を甚しく害ひたり。我等が一家の貧困疾苦を免かれんが爲めに、神佛に祈願をこらし、難苦を敢てしたるも、一として其効驗なく、貧苦はいよ／＼つのり、一厘の錢だに、最早掌中に殘らぬに至りては、此度は家寶とし傳へたる寶玉、高貴の裝束、銀製の器物より、果ては眞鍮、また銅の食器までも盡く賣代なして、其價は之を僧侶の布施となし、遂に僅かばかりの銀貨銅貨の外は、我等のものとしては殘らざりき。此金にて幾許の玄米を買ひ、非常に節約して之を食しつゝ、やうやく數日の間、露の命を繼ぎとめしも、之れとても終には一粒だに餘さぬことなり、最早餓死を俟つより外、我等はせん術なきに至りたり。あはれ、其悲慘、不幸に加ふるに、階級に對するの不名譽いかばかりなりしぞや。

之を思へば、暗々と餓死もならず、兎やせん角やせんと互にいひつのりしも到底遁るべきの運命にしもあらざりければ、結局、不名譽の最後の衆人の目に觸れて、恥を殘さんよりは、及かず、森林に隱れて死せんにはと決して、其夜我等が住へりしチルパシー（ヴエンカトキリ山上に在る神聖なる市街）の家を出でゝ、大森林中に隱れ入りて、爰に哀れの最後を遂ぐることはなせり。それより十一日が程は木の葉と水と、一握計りの野生の棗とにて、やうやく命ばかりは繼きつゝ、日夜いたく身を苦しめ心を痛めたりしが、此時飢餓の苦痛の非常なるより、老衰せる父は最早堪ふること能はず、よりて傍に在りし、神に備へたる大水槽の中に身を投じて、此世の苦痛

を遁れんものとあはれにも決定し、また殘りの家族の者は、父と共々に身を投ぐるか、若くは分れ〳〵になりて、思ふ方に行くか、二つに一つの道を執るべきことゝなりて、我等は無乃、投水せんこそ、最も適當なれと思ひけり。父は第一に身を投げんとして、家族の者一人々々に永別の言葉を述べ、末子の妾に向つては、目しひたれば我顔を見ることのならざりしかども、妾の頭や頬を撫でゝ、いたく妾を愛せしよしを語りもしも幸に此世に生き存らふることを得ば、必ず正しきを守りて、神に仕へよかしと云殘したるを、聞く妾はたゞの一言をも答へ得ざりき。やがて暇乞も終りしかば、父は我等を遠けて、たゞ一人、暫く默想に入りて、最後の用意をなしつつありしが、此瞬時に、神の惠なれや、兄は階級の誇りを全く打ち棄てゝ、勞働によりて老いたる兩親を扶持せんと決心して、其由を父にも告げ、其投水を思ひ止まらしめ、父は足弱の身なれば、兄は自ら背負ひて、近在の村落まで一先立ち出づべしといふに、これを聞く我等は欣喜の情に堪へず、直に林中を出づるの用意をなしたり。されど此時に當りても、なほ虎か蛇か、もしくは其他の野獸の來りて、一思ひに我等を食ひ殺し呉るればよきにと願ひたりき。

森林を出で了るまでに、殆ど二日間を要せしが、父は此旅中始終いたく苦痛を覺え、飢餓と困難とは其弱々しき身を責めさいなみて死期を急がせたり。困苦一方ならずして、やうやくに人里に達して、とある寺院に休らふべき陰を求めたるに、弱きもの、助けなきものに對しては、一も慈悲の念なきブラミンの僧侶等は、我等を追ひ立つるまゝに、やむなくまた此處をも立ち出で村里を去りて、一の廢寺の住む人とてはあらず、夜は野獸の宿となれる所にて、四日の日を過ごせしが、一人の年若きブラミンは、我等一家の不幸悲慘の状態を見て幾許の食物を惠み呉れたりき。

森林を出でゝ、村里に達せし其日に、父は熱病に罹りしが、是が爲に終は起たずなりき。罹病の第一日に父は些少の砂糖と水とを求めしまゝに、我等は水を與へしかども、砂糖を得ることを得ず、父は粗食はえ食はず、終に三日目の朝に至りて、此世の息は敢なく果てにけり。

彼食物を惠み呉れたるブラミンの青年は、また我等を助けたり。勿論彼は我等もまたブラミンなるや否やを知らず、且つ

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

村民一人として我等に力を假すなき者より、もし輕々しく我等を助けて父の遺骸を葬ることなどをなして、爲めに其階級を退けらるゝことありてはとの掛念より、その爲めには出で來らざりかなれども、自ら財を投じて墓所を堀りて、我等に與へ、また河の畔までも、野邊の送に伴ひたり。

人なき野邊に父を葬り了りて再び廢寺に歸りしが、其夜よりして、母は赤熱病に犯され、自ら回起の望みなきをいひしかども我等は此處にあるとも一の職業だになく、また食ふべきものもあらざりければ、詮方なく／＼、病母を伴いて、此處をば去りて、道に情ある人々の恩惠によりて食物を得、また旅費を得てレイチユアといへる地に來りたり。此地に在りても、失望と飢餓とに逼まられ、兄は身躰弱くして、勞働に堪へず、されはとて我等は食を他人の門前に乞ふの決心もつかず、たゞ折々心ある人の情を受けて生ながらへしが、母は熱病と飢餓とに苦痛を覺ゆると甚しく、屢々夢中になりて、かれ欲し、これ欲しと異なりたる食物を求むるとありしが、母の食し得るものとては、極めて些少のものなりしにも拘らず、我等は其些少なるをさへ一も與へ得ざりき。

或時の如きは、母はあまりの飢に苦んで、妾を使はして、隣人に粗製のペッユーリー麵包を乞はしめたるに、妾は嫌々ながら命に從ひて行けり一人の婦人は親切に妾の求むる處を尋ねたれど、口を開いて欲する處のものをいひ得ず、我慢強くも、涙を押へて心の中を隱さんとしたり。さるにそのブラミンの婦人は、妾の胸中を推し量りて、何か食物の欲しきやと尋ねしより、爰にやうやく其旨を通じたれば、彼婦人は心よく、乞ふ處のものを與へし故、難有さをのみ感じつゝ、一言もいはで、急き母の許に歸りて之を與へしも、母は衰弱甚しきより、最早之をも食ひ得ず、かくて數日の後遂に死去したり。

姉もまた疾病飢餓に苦しんで、遂に餓死したり、姉の死する前數月間、我等三人の同胞は、食物または職業を求めて、此處彼處と彷徨ひしも、孰も得ると能はざりき。姉既に逝いてより、兄と妾とは悲慘なる巡禮者の境界を追ふて、遂に印度の北境に赴き更にまた東に向て、遙にカルカツタにも至り、此間多くは漂泊浮浪者の生涯を送りて、ときとしては數日間一食だに得ずして過したることさへありき。ときとして、

兄は職業にあり付くとのありしも、極めて些少の賃錢を得るのみにして、これが爲めに、一握の穀物を水に浸し、之に鹽を添へて、食物とせしことも多かりき。足には靴を穿つことを得ず、また雨露を凌ぐべき便りなく、夜は路傍の樹陰、橋下若くは靑雲天井の下に眠りたり。嘗てブンヂャブのジエルム河の堤坊上にては、寒氣凜烈にして堪へ難きより、墓穴の如き二つの穴を堀りて、其中に横たはり、乾ける砂中に身を埋めて、僅に首のみ顯はしたることありき。また時としては、空腹を充たさんか爲めに、一握の野生苺を食ひ、硬き核をも、皮まゝに呑み下したるよありき。

如斯くに甚しき欠乏窮苦の中に四年の日子を過しゝが、幸に、父母また姉にも優りて、首尾よく困難と戰いて天命を完うし得たり。父母は其臨終の期までも、愛子を一人欠かさず傍に集へ居りしことは、やゝ我等の慰めとはなれども、其最後の悲慘の狀や、思ひ出つる毎に、妾の胸は破るゝ計りなり。此悲痛極まれる、實歷談は、妾は今日の如く餘儀なき塲合の生ずるに非らざれば、決して語るまじきものなりしが、妾の友人諸氏は、妾自ら、嘗て今日中央印度の餓死に瀕しつゝある、無數の人民と同樣の經驗を嘗めたることあるを知らずんば、此度の飢饉に對して、妾が那計り、悲痛の情を抱きつゝあるかを量り得ざらんとて、斯くは述べたるなり。

* * * * * * *

以上自己の悲慘なる閱歷を述へ來りて、ラマベイ女史は、今次の印度大飢饉の狀況を視察のまゝに說話したれども、其條は爰に譯載せず。

落花飛蝶

○服部南郭新年の禮を述べんと徂徠を訪ふ徂徠南郭が來るを意に介せざる如く、孫子を手にして熱心に讀み居たれば、南郭新年の賀を述ぶべき折を得ず、彼が少しく心を他に轉ずる時を伺ひ、新年の祝辭を大聲に述べければ、徂徠茫然たる如くなりしが、漸くに心付けるものゝ如く、「新年と成りしやこれは〳〵」と云ひて再び孫子に向ひ他を顧みず、實に彼は新年を知らざりしなり。

○岩崎彌太郎三菱會社に長たり、折しも會社の瀛船壹艘沈沒せり。其船長來りてしきりに己が罪を謝す、彌太郎平然として曰く、天變に遇ふて瀛船の沈沒する事はあるべきの事にして、意とするに足らず。其損失も知れたものなり、然れども當會社內の役員等始め、各瀛船中の水夫ボーイの如きまで、白紙を以て鼻を拭ひ、或は用なきに無盡薪炭油を費して顧みず。五寸の糸屑をつなげは、終に布を織り得べき覺悟なし。一文半錢の浪費等これあるまじき事なり、瀛船沈沒の損失より、余は日々の余計なる消費物の損失を恐ると。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

古事斷片（三）

◎京都の一名物なる大原女は、一種異樣の容姿をなせるが、特にをかしきは脚袢を前に合するとなり。こは其昔建禮門院、世を遁れて、大原山に在りし時、從ふ局內侍等、所の黑木を賣りてたづきとしたるに、彼等賤の業に馴れず、脚袢を穿く術を知らず、向臑にて合せたるとの遺風なりといひ傳ふれども、故實の眞僞は知り難し。

◎旅にいづるを鹿島立といふは、旅立前の日、鹿島に鎭座まします、阿須波明神を祭る習ひありし故なり。此神に御饌をさゝげていのれば、旅に在るもの飢につかれずとの俗說あり。我子我夫の旅なるものに影膳とて供ふるは、元此神を祭るの遺風なりといふ。

◎昔の高僧の諸國を行脚巡錫して、靈塲をたづね、寺堂を建立せしは、佛敎傳道の本旨の外に、諸國を開拓し、文明を普及するに於て、最大の有力者たりき。行基上人の如きは、其巡錫の結果、風土記を編み、於爰乎、我國はじめて地圖あり、地理書あるに至りたりといふ。

◎天智帝の朝藤原鎌足執政たりし時代に、百濟の尼法明といへるもの、對馬に來り維摩經をそしへしが、これを對馬よみといひて、呉音のはじめなりといふ。

◎魏文帝曰く文章は經國の大業、不朽の盛事なり、人壽は時ありて盡き、榮樂は其身のみに止まりて限りあり。獨り文章は天地のあらん程は世に傳はりて朽ず、最も勤學すべしと。

◎元祿十五の師走の夜の雪に其美名を留たる赤穗四十七義士の一人、大高源吾は沾德の門に入りて俳名を子葉といひ、俳諧に長ぜり。この人質性もと戇直にして卒急なりしより、大石良雄、之に勸めて心氣を養はんが爲めに俳諧を學ばしむ。子葉よりて斯道に志せし發端一句を得んものと思いめぐらせし折柄、時は春のはじめにて庭に鶯の初音珍しく聞ゆるより、

　鶯の初音をきく耳は別にして置く武士かな

とよみて竊に大石に示せしに、字數もそろはず、てにはも調はねども、風流の氣韻高尙なるものあるを賞して、更に工夫すべしといひしかば、二十日許も考に考へを凝して、

　初音きく耳は別なる武士かな、

るよみ、更に亦十五日餘の工夫を積みて、

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

武士の鶯きいて立ちにけり
といへる天晴の名吟を得たりとなん。

春日野遊

告天子

大塚楠緒子

緑の波をよせかへし
見る／＼あがる汝が行途
滿つる日の影をばゆくて
かさなる月輪かきわけて
晴く聲をきゝてだに
さゝやく心なにならむ
思ひ及ばぬ汝雲雀
神の心をうけ來ては
うらやましさよなれ雲雀

朝かぜそよぐ麥生より
聲を慕ひて見あぐれど
仰ぎもあへぬ雲の奥
何をか天に告げ來らむ
しのぶる節の長閑けきを
地をばなれぬ我人の
雲の宮居にゆきかへり
何さ天地を悟るらん

此處彼處

緑のつばさに風輕き
咲くか菫の四つ五つ
黄いろを添へてたんぽさへ
さりそろへたる彩色は
春の野道此處かしこ

畔の小道の此處かしこ
まじる菫も二つ三つ
もゆる小草はみどり濃く
如何なる筆の染めにけん

隨感

○大勢の人

勢は是れ天地大需要の發作の機運なり。此に乘ずるとは此に順ふの意義、大人は畢竟私なくして之が爲めに役僕となるのみ。試みに思へ、眇たる個人、大勢に逆らふとは何の勇ぞ人生必然の大道に背きて何をか誇らんとする。草木自然に榮枯し、山水長久へに行座す。ひとり人間翩然として天地靈妙の運氣に反し以て万物に優れりとす、何等の痴態ぞ。此を以て先人數ば大勢の論あり、而して能く大勢と合躰するものは蓋し尠し。朗然として大勢と相一致するは、私なきをもて最初とす。私あるは偏偶に僻するなり、その大躰と疎通せざるは當然の數ならずや。天地の慈愛あるや雜草をすら尙ほ繁茂せしむ、素より我をして餓ゑしむるものにあらざるに、故らに憂苦して其の食の爲に私せんとす。人生もと僥倖を容れず、事業惣べて人品の反映に過ぎざるに、徒らに煩悶し

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

て爵祿の爲に私せんとす。光明もと透徹することを好み、西東北南の何れの處にも惠射せんとすれど、人自から蔽ふて故らに暗黒に就く。人の大勢に後れて人生無用の器となる所以のものは、只だ自から招くに過ぎざる也。草の伸るを見よ、水の流るゝを看よ、火の燃るを看よ、すべて皆な發動成長せざるはあらず、人間もし日に月に衰へて遂に萎徴不振の奴とならば、恨事何か之に過ぎん。

○官祿

官祿は公祿なり。須からく其の職務の爲に使用し盡すべし。今の官人大抵其の幾分を貯蓄して毫も恥とせず、俯仰古人に對して如何か思惟する。貯蓄亦た不可なし、異日蒼生の疾苦の事あらば、則ち當に義捐し盡すべきのもの、何等の道義的權利かありて之を私せんとはするぞ。今古、爵祿を受けて富めるもの多けれども、其富たる素と公祿の盜まれたるに異ならず、たとひ激烈なる革命者ありて世の疾苦の者の爲に之を要求すとも、何の辭をもて防がんとはする。憐れむべし、如今一種の盜を爲して、暫く豪然として誇り、遂に子孫の災となるを知らず。徒らに尋常の勞役論を主張して官祿をもて事務上の收入と同一視す。其の議論は或ひは達することを得ん、天下の公道と、人情の微妙とは、遂に之を承知せざるを如何んせんや。

ながめこし花もむなしく散りはてゝ
跡なくはるのくれにけるかな
思ひいづる過きにし方をはづかしみ
あるにものうき此世なりけり

時文

◎脚本俠客春雨傘　櫻痴居士作　春陽堂版

小說俠客春雨傘を、團州一門の歌舞伎座四月狂言の爲めに書き直したる此脚本は、一言すれば、彼小說なるよりも見優りのせらるゝ心地す。素より、江戸ッ兒にうけのよき樣に、また役者に當てはまる樣に仕組みたるもの故、たゞに脚本として、文學の上より見て、之を理屈的に評すれば、筋道の立たぬ處、ハンマなる處多けれども、又實際此樣のものにてなければ、演劇にはならぬなるべし。此脚本を讀みたる上にて、一たび歌舞伎座を見舞はんか、まとに見事の芝居なり。櫻痴の脚本や最も成功したるものとの評あるも無理からぬ事なり。其書き流し方の熟妙なる、また經驗あるとさ、而して此脚本の成功の大部分は、これが江戸ッ兒の作者が江戸ッ兒氣性を書きたるによれり。去かして江戸ッ兒の役者これを演ず、江

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

月ッ兒の見物人は、仲の町喧嘩場の場面の出などを見ては、飛立つ程面白くてたまらぬなり。

一体脚本には、文字の上より、理屈の上より見ては、可笑しげなる處が多からざれば、實際の芝居には出來ぬよし。されば理屈は立ち、筋道はよく通つても、牧の方、桐一葉または其の他の脚本の如きは、到底今日にては芝居とはならざらん。

◎花柳おた福　　春陽堂版

粋人の友として、俗曲より、雅曲、雑曲、浄瑠璃、安保多羅經など、其道の通人の作になれるものを集めたるものなり。

◎舊幕府第一號

戸川殘花氏、榎本、大鳥、勝、田邊、木村諸氏の賛助を得て、爰に舊幕府と名づくる一雜誌を發刊す。讀むる處の掃蕃、史料、耳袋、荊叢、等、みなこれ有益、舊を追ふて新しきを知るの好指針たらんか。好個の雜誌、希はくは發達成長せよ。

◎女界文壇雜俎

四月下中旬

◎女子教育は國家最大進歩の要鍵(クラーク、パリッシュ)	英文國民の友四月分
◎女子論(佐藤淑治)	心海　第四十四號
◎家政論(富井南軒)	傳道新誌第十年第四號
◎女子大學校の設計に就きて(加藤之薪)	女鑑　第百三十號
◎女子教育の普及法私考(大河內友吉)	女鑑第百三十一號
	(山梨教育會雜誌より轉載)
◎女子教育振起策續(成瀨仁藏)	教育公報　第百九十一號
◎蜂須賀侯爵夫人の女子教育意見	仝
◎女子教育に就て(柳城居士)	基督教新聞第七百十四號
◎美男及び美女	英華峯　第十三號
◎婦人の理想	婦人弘道叢記　第三十一號
◎家庭の眞價(クラーク、パリッシュ女史)	家庭雜誌　第百號
◎戰後女子教育急務(井原恒也)	兵庫縣教育會雜誌第九十二號

女學科を異にするか、若くは男教教授方法によりて、女子教育の目的に適合せる教授を與ふべきと、(三)教科書に對しては……

片々

◎明治四年　日本最初の洋行女學生なる大山侯爵夫人、瓜生夫人、津田梅子、吉益亮子、植田貞子の五人、將に本國を發せんとするや、宮中に皇后陛下の拜謁を賜はりたる後、各一通の書面を受く、こは畏しきあたりの令旨なりといふ。其文に曰く、

其方女子にして洋學修行の志誠に神妙の事に候追て女學御取建の儀に候へば成業歸朝の上は婦女の模範とも相成る樣心掛日夜勉勵可致候事

辛未十一月

これ日本女學史上に記すべきの一要料なり。(本誌第四百三十八號參照)

◎女子の就學　を增加せしむる方法として埼玉縣教育雜誌に見えたるには、(一)女子をして、男子と別に教育を受けしむること、(二)裁縫科をして女子必須の學科となすこと、(三)不就學女子の父兄を勸誘すること、(四)子守科を設置すると

◎奧羽六縣北海道聯合教育大會の五月初旬盛岡に於て開會せらるゝに際し、秋田縣教育會より提出する問題中第五條には女子の就學を多くする法案如何といふがあり、其理由は我國就學の少き原因は女子の就學數少きによる故に、女子の就學を多くするは目下の急務なるを信ず云々といへり。

◎同會　の爲また岩手縣教育會より提出すべき問題中、奧羽六縣一道廳各地に一個の高等女學校を設立するの議、といへるあり。

◎山梨縣教育雜誌に載せたる大河內氏の女子教育普及策に曰く、第一女子と男子とは教室を別にすべし、第二尋常科の教科目中にも裁縫科を加設すること、第三尋常高等を一校に併置すると、第四師範學校女子部を擴張するか、乃至は郡費を以て女教員の養成と奬勵とを行ふと、第五基本財產蓄積法を規定すると、第六學校設備法を勵行して校舍の增築又は新築を決行し、其他の教科用具をも設置せしむるとを積極の方法となし、

◎又消極法としては、第一、十歲以上にして學業證書を有するものゝ外、小兒をして傭役勞働に從事せしめざる事、第二就學義務を怠るの父兄を罰する事、また彼等の姓名を市町村役場又は其所屬の學校掲示場に掲示する等なさるべしといふ。

◎三重縣　度會郡河曲郡教育會の、女子教育を普通ならしむるの方案に曰く、(一)就學規則を勵行し、保護者の義務に對する制裁法を設くると、(二)小學校の教授は

女學級を異にするか、若くは單級教授方法によりて、女子教育の目的に適合せる教授を與ふべきと、(三)教科書に對しては、大に改竄を加ふべきと、(四)裁縫教授方法には、大に改良を加ふべきと、(五)小學卒業者を待つべき女子高等學校、及女子職業學校の設けは可成多からしむる事。

◎今や女子教育の普及法、女子就學の增加策等は、少しく教育をいふもの丶唱へざるなく、斯道の盛運隆々として來る。然れども一方より觀ずれば、此盛運は却て、女子教育の眞相には損失を招くとなきか。或は女子教育を盛んならしめんが故に、女子に要求するに速成にして多能多藝ならんとを以てすると今日の如きもの、教育上甚だ喜ふべきの現象なり。

◎船頭　多くして舟山に登り、料理番多くして、ソップ腐敗すとは、是れ今後の女子教育を諷譏するものならずんば幸なり。

◎佛國　巴里にて皮膚を美麗ならしめんが爲めにモルヒチを飲用するもの其數五万人の多きに達し、其中女子は三万人以上を占むと。

◎指を賣る　とはこれ米國紐育に於ける近事の奇聞、時事新報傳へて曰く、或る外科醫パートン夫人と稱するものより指の療治を依賴されたる所、其指到底治癒の望なきに依り、切斷して健全なる指と繼ぎ替へんことを患者に勸告し、普く廣告して指の賣手を求めたるに、天下は大なり人間は多し、間もなく一人の女我こそ其指を賣り參らすべけれと、醫師の玄關に現はれ出でたり。此女名をクレース、ザンスモーア孃と呼ぶ歌妓志願なるが、幼にして父を失ひ、家貧にして其望を果たす能はず、是に於て其指を一千弗に賣却し、其得たる金錢を携へて、ボメトンに赴き音樂學校に入らんとするものなりと云ふ。

◎小川將軍夫人　勝手口に白の腰引を穿ちて、下女と共に勞働し、出入の肴屋をして迷惑がらしむ。身富貴に在りて、この業をなす稱すべし。

◎支那上海　の軍艦の一兵勇、近來一子を艦中に生む。衆皆其怪に驚く。されど其實を尋ぬるにこれぞこれ、數年前其良人此艦中に兵勇となりたるより、鸞鶯の羽を比ぶると能はざるを歎きて、自ら亦男裝して其許に來り伉儷の情契、いと細かなりしより、此一大椿事を惹起せしものぞ。蓋し支那の兵艦にして始めて此奇聞あり得べく、而して此女子はまたこれ貞婦烈女傳中の一人か。

◎懸賞新案　兇賊あり去る廿七日夜東京御茶の水橋畔に一婦人を虐殺して慘狀を極む。而して犯罪者蹤跡を失して、警吏百方蹤跡するも獲ず。爰に時事新報金時計一箇を懸けて、彼暴人を探偵捕獲したる警吏を賞せんと廣告す。これや我邦には未曾有の懸賞案。

時報

◎英照皇太后陛下御百日祭

英照皇太后陛下の御百日祭御執行につき、天皇　皇后兩陛下には去月十七日東京御發輦。京都へ行幸啓被成れたり。御百日祭は。同月廿日泉山御陵にて御執行あせられしと承はる。

◎故瓜生岩子女史

前號既に報じたるが如くに、福島瓜生會々頭故瓜生岩子女史は去月十九日病を以て、同會事務所に死す。其生前の履歴とて報知新聞の傳ふる處によるに、女史は文政十二年五月福島縣下耶麻郡喜多方町福島某の家に生れしが、幼より慈善の志篤く其十七歲瓜生氏に嫁し、三十四歲を以て寡婦となりしや、これより一身を慈善の事業に委れ、以後七年間に救濟せし孤兒三十人、之が爲めに一千餘圓を費して厭はず。貧者の兒を生みて養育すべき力なきものは、滿三ヶ年の其間一ヶ月金五十錢つゞと時服各一通りとを贈るなどの行ひありしより、人々女史を名ぐるに、「施しの婆樣」の稱を以てしたりといふ。維新の際には、會津地方兵亂の爲、民業荒廢、人民塗炭の苦を訴ふると甚しきを見、明治二年女史自ら率先し金五百圓を醵つて、一の學舍を起して子弟の敎育に從事したり。また嘗て鈴木某を聘して產婆研究所を起したるとあり。明治六年大塚某東京深川に救養會社と稱する孤兒救濟所を起したるを聞くや、上京之を視察して歸國するや、自ら亦孤兒敎育院なるものを創設せり。爾來十四年此事業に精勵しつゝ、明治二十年に至り時の福島縣知事折田平內氏と計りて、信夫郡福島村に一の養育所を新設したり。明治二十二年より廿三年に至りて、福島縣下には希有の大洪水ありしかば、女史は自ら家財調度をも賣却して多くの窮民を賑はし、また飴粕を以て麵包を製造することを發明して饑飢の民を救濟したり。二十四年東京養育院の聘する處となりて、幼兒世

話保長となりしが、間もなく之を辭して郷里に歸り、二十五年多くの貴顯夫人の贊助を得て、福島瓜生會を起し、貧民救護の業に從事するに至れり。二十六年濃美地方震災に際しては、會員伊藤某女を同地に派遣して、救助に盡力せしめ、また傷死者の靈を弔慰せしめたり。此類の善行いつしかに九重に達し、皇后陛下より親しく長しき御言葉を賜はりしことさへありしとぞ。廿五年、廿七年の前後東京府知事赤十字社等より褒賞褒狀等を受け、廿九年五月廿一日には、賞勳局より藍綬褒章を下賜せられたり。然るに女史は本年一月中旬頃より、心臟病に罹り種々治療を加へたれども醫藥其効なく、いよく危篤に赴きけるよし聞こし召れて、四月十七日　皇后陛下より御菓子折を見舞として下賜せられたりとぞ。かくて二日を隔て十九日終に死去す行年六十有九といふ。

◎英國派遣大使　來る六月二十日を以て英國女皇ヴイクトリア陛下の即位六十年祝會執行につき、大使として有栖川威仁親王、該國へ差遣はさる。皇室よりは英皇への御祝賀贈物夫々ありといふ。

◎華族女學校の改善　同校は是迄士族平民の女子をも少數を限りて入學を許可し來りしが、今般長きあたりよりの令旨により、更に汎く一般の女子にも入學を許可することゝなるべしと新聞紙は傳ふ。

◎秋田縣師範學校女子部卒業生　卒業式は去る三月二十五日執行卒業生は小原みよの、椎名のし、森口さよ、東海林えつ、目賀多たけ、青柳さし、川井なほ、泉つれ、平澤くら、佐々さし、安井はな、椀田ゆき、皆川きん、武崎さき、横山よれの十五名。

◎同志社女學校二十年期紀念式　は去月廿一日を以て擧行したるよし

◎久留米絣織工場　山口縣人拂村三九郎氏は、此地方實業の不振にして、婦女子の正業なくして遊び廻るもの多きを憂へて一大職工場を起さんとて、二ヶ年前より博多久留米地方に行き、種々視察し、愈此時機の熟したるにりて、久留米より織子糸操染子等を聘し現今工女募集中との事なり。

◎婦人矯風會々頭　先月二日三日の兩日、神田青年會場に於て開始せられたる同大會に於ては、會頭の改撰を行ひたるに、矢島楫子再撰せられ、なほ他に數名の補助員を擧げて、會頭を補佐することゝなしたり。

◎三重縣基督教徒婦人大會　四月十三日より三日間津市丸の内會堂内に於て開く

◎子守教育　愛媛縣西宇和郡にては、貧困にして子守をなす爲め、就學すると能はざるものゝ、年齡九歲以上にして町村長の證明あるときは幼兒を携へて小學校に出校するを許し特別の取扱をなすといふ。

◎女禮式試驗　四月十一日土佐國土佐郡小高坂村勝賀瀨女藝傳習所に於て小流女禮式試驗を執行したり。

◎育啞學校の　四月十七日第九回卒業式を擧行したる際、啞女生須賀ふみ子（十六歲）の文部大臣の祝辭に答へて

私入學以來數年の久しき校長始め先生方の御懇ろなる御教育を頂きお蔭を以て今日文部大臣閣下御來臨の席に於て卒業の證書を授けられ私の嬉しさは素より母の悅びは限りなきことに存じます私は三歲の時六歲の姉と共に父に別れ兩人僅かに母の手にて養はれましたが不幸にして姉妹共に啞となり世に厄介者と侮らるゝ筈でありますのを大御代の深き惠みと先生方の御惠とに依り先きには姉常子卒業となり今日私が卒業を得て尋常の人と交際ふことの出來る樣になりました此の有難さを思ひますれば思はず淚が溢れます玆に謹て御禮申上ます

といひしには臨席の文相はじめ坐客の袖には淚のつゝみかねしがありしとぞ。

◎女子高等師範學校保姆科生徒募集

女子高等師範學校に於て、今般保姆練習科生徒二十人を募集するにつき、志望者は來る六月二十日限り、同校に願出つへしとのとなり。而して入學志願者の資格は、修業年限六箇年の高等女學校卒業若くは之と同等以上の教育を受けたる者にして年齡十七年以上三十年未滿の者、入學試驗は七月一日より仝三日までにして、試驗科目は躰格、國語、算術、歷史、理科、音樂圖畫なり。但修業年限六ヶ年の公立高等女學校を卒業せる者、及尋常師範學校第二學年の課程を修了せる者は、躰格、圖畫、音樂の外試驗を行はざる由なり。且又生徒の學資は自辨にて通學なるも、授業料を徵せず。書籍器械の如きは、成るべく同校にて貸與することとなり。

◎英國婦人の義勇　昨今破裂したる希土戰爭に際し、負傷者救護の爲め英國のオルミストン、チヤント夫人及び六人の看護婦は四月八日クリートへ向ひて出發せり。其費用はヘンリー、ソーマーセツト夫人及びケース氏之を負擔せりといふ。

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

舊幕府

第壹號 四月廿日發行

○一部拾貳錢○郵稅壹錢○六部郵稅共前金七拾錢○十二部郵稅共前金壹圓三部錢○毎月一回十日發行○郵券代用一割增の事舊幕府は勝伯、小笠原、榎本兩子爵大鳥、栗本、向山、杉浦、木村、澤、田邊、諸元老の參助を得て殘花戸川先生が編集せらるゝ所の雜誌なり德川氏の盛衰と日本文明の發達を知らむと欲せば該誌の右に出づる者なし敢て喋々の廣告を辨ぜず

目次◎**戊辰の夢**(澤氏日記)◎**南柯日記**(大鳥氏脫走日記)◎小笠原壹岐守傳(田邊松坡)◎監察の勤向(木村芥舟)◎懷往事談(田邊蓮舟)◎榎本氏のおひたち◎氷川茶話◎**昔のポンチ畫**◎義太夫節作りかへ◎詞藻(本多晉栗本鋤雲向山黄村木村芳舟)◎史界批評◎都門月表(羽倉蓮齋木村芥舟)◎挿畫寫眞**東照公肖像**並和歌親筆 **小笠原壹岐守肖像**並詩一首

第貳號豫告目次

◎彰義隊發起顚末◎軍艦開陽丸の終始◎幕臣小傳◎將軍家の朝夕◎大奧の服裝考◎田中廉太郎氏書翰◎文久甲子の震翰◎挿畫寫眞版三代將軍家光公和歌親筆◎木版彩密畫大奧の五節句其一(永洗)

發行所 東京神田區裏神保町九番地 合資會社**富山房雜誌部**

日本宗敎

第二卷第十號 明治三十年四月三十日發行

口繪 博士バローズ氏肖像

社說
普通敎育に於ける宗敎
理想なし生氣なし何故ぞ

論說
工場傳道の眞義 山形東根
監獄敎誨論 留岡幸助
人生依立論 觀潮花

雜纂
古代法取調項中の宗敎事項 鈴木券太郎
淸風敎話 駒能生
雲龍寺 希聲
世相莠言 發花
京都市内の宗敎一斑 志ゑ
越中永見郡地方の宗敎 公眼子

思潮
第二回宗敎家懇談會詳報
◎來會者の宗派職業姓名表
◎辨子濱敎役者會の思潮 吾等今日の欠乏◎信者の訓練◎敎役者の自修
○禪話(釋宗演)○永生の冀望(内村鑑三)○宗敎畫(黑田清輝)○宗敎感は女性の粹なり(女學雜誌)○佛敎作振策(岡本柳之助)

時流
社會學會第一回會合○比較宗敎學會の研究○丁酉懇話會の設立○上宮敎會○京都各宗寺院史の編纂○有志傳道隊其他

改正 定價一部金拾錢 郵稅五厘

東京麴町區下六番町六番地 **日本宗敎社**

◎切拔通信の要旨

◎切拔通信をなすへき概目は農工商業政治法律外交貿易政黨倶樂部教育宗教歷史音樂運輸交通土木建築鑛業山林美術技藝各人身上に關する事等凡そ諸新聞紙上掲載の件は小說廣告に至るまで皆委托に應し精密遺漏なく勉めて配達を迅速にして以て愛讀者の便益を期す

東京市京橋區采女町廿一番地
時事新報社内
新聞切拔通信部

◎切拔手數料大要

●一己の身上に止まる通信は一ヶ月金貳拾錢とす●一會社又は一事務に止まる通信は壹ヶ月金參拾錢より金五拾錢まで●一會社又は一團体は全般に關する通信は壹ヶ月金五拾錢より金壹圓まで●前記の三項と雖とも關係の範圍廣く日々記事の多數なるものは臨機の契約を爲すこともあるへし●月數に拘はらす件數にて委托せらるゝものは壹項は十件に付金貳拾錢地方は郵稅を併せ金參拾錢とす尤も細事項は總て號外として件數に算入せす●本社切拔通信規則書御入用の方は御通知次第郵送すへし

明治女學校圖書寄附募集廣告

本年二月五日我校不慮の火災に類燒せし際、多年珍藏の書籍悉く灰燼に歸して、片影をだに留めざるに至れり。然るに我校は大方有志の同情いと懇篤なるによりて、再び爰に新校舍を得たると共に學校組織中の甚だ重きをなせる知識の倉庫たる書籍館を再興且盛美ならしめんと欲すると切なり。幸に有志の僥に、堅牢なる書籍庫の建築寄附を約せらるゝあり、之に充たさんは、五車の書尚は尠しとなすべし。由つて天下の有志に斷る、冀くは之に盈て、之れを盛んにせんが爲めに、或は珍藏の美書を割愛せられ、或はまた高著の良書を寄贈せられ、以て我校をして、永く其芳志を記せしめんことを。

明治三十年五月

明治女學校圖書館掛　謹言

○和漢洋書類何種のものにても御寄附相願候
○御寄附なし被下候に於ては、地方にては、運賃當方にて御返濟可致候也
○また市内に候はゞ、第一報次第受取人差遣し可申候相願候然らば請取證差上け申候際、御返

擴張!!!

東京經濟雜誌

愈々本號より擴張せり!!!社說◎財政紊亂◎金貨本位實施の困難◎營業稅論說◎十年其財政の位置(香港榎本人)
!!!の苦情多き理由◎嫉視と營業稅、外三件
寄書三件雜報◎ダロウ稅◎營業稅法實施の發狂天下騷然たり◎外國貿易外數件
と金銀の輸出入◎預金預合の決濟◎海外經濟の情
「承久以後の鎌倉時代」を掲載せり　外に支那海の一欄あり　田口鼎軒の

舶來紙六拾頁
第八百七拾四號
定價一冊金拾錢　十冊前金九拾錢
(市外一冊郵稅一錢增)

發行所
東京京橋區彌左衞門町
經濟雜誌社

大取次
◎東京○東京堂、東海堂、北隆館
◎大坂○岡島◎京都○東枝、大國屋

◎第二版成る◎

故若松賤子女史譯述

小公子

全一冊洋裝美本
番數三百五十頁
正價金三十五錢
郵稅 八 錢

近代歐米の讀書社界を震動し、劇場に演ぜらるると數十回、一代の流行を左右して一時少年の子をして悉皆小公子の如くならしめしと云ふは、此書原本奇代の勢力なり。純潔無邪氣、天使の如き一少年は、頑陋執拗の老侯爵を感化し、德に隣あり、母に佳人あり、貧しきを憐み、小作者を愛撫し、言行惣て甘露慈雨の如し、讀去り讀來るうち讀者亦自から化せらるるを覺ゆ、何ぞ其の可憐高潔なるや、少年固より讀まざる可らず、婦女老人亦讀まざる可らず。賤子女史嚢に其前篇を譯して世に公にするや、譯文の巧妙を以て亦た一時に喧傳す。森田思軒居士之を以て明治年間譯文の最上乘のものとし、激賞措かず、曾て其第一頁を見て忽ち驚き、一夜通讀、曉に徹し遂に卷を釋る能はざりしと云へり。然るに女史其後篇を公にするに及ばずして不幸長逝し、知人愛惜の情を寄せらるると切なり。即ち玆に其遺稿を收め、女史が一周忌日に會せんとして前後二篇を合せ刊行せしむ。其友湘煙中島女史は字を題し、鄕友松井昇氏は密畫を附せり、同好の士、希くは一讀を賜へ。

出版元 東京日本橋區本町三丁目 博文館
大賣捌 東京麹町區下六番町六番地 女學雜誌社

社告

鈴木弘恭大人講述
百人一首講義
正價金廿八錢
郵稅 四 錢

布川靜淵、小此木秀野合著
俳諧史傳
正價二十七錢
郵稅 四 錢

巖本嘉志子
若松賤子英文集
正價廿七錢
郵稅 四 錢

池袋淸風大人著
淺瀨の波
第一篇二冊 第二篇二冊 正價二十八錢同
郵稅一篇毎に金 六 錢

明治廿七年二月十四日內務省許可
明治三十年五月九日印刷
明治三十年五月十日發行

發行兼編輯者 東京市麹町區下六番町六番地 巖本善治
印刷者 東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地 根岸高光
發行所 東京市麹町區下六番町六番地 女學雜誌社
印刷所 東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地 株式會社秀英舍第一工場 (電話本局十九番)

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

明治廿五年三月十五日遞信省認可

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

明治廿五年三月十五日遞信省認可

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY